
歌姫物語（ディーバ・ストーリー）

HOTAKANA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「PDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デイーパ・ストーリー
歌姫物語

【著者】

N4183V

【作者名】

HOTAKANA

【あらすじ】

世に納められる魔歌、その手に全て集めし時、汝は歌姫となる

マレーヌ（マリアンヌ・ピアーノ）は風の王国のお姫様。おでんばではひめひやな彼女が得意とするのは、『魔歌』。

マレーヌはお供のマーロンと共に、世界各地に納められた魔歌を探す旅に出る。その目的は古の魔歌を全て集めて、世界最強の歌姫に

なること。そして、母親を、世界で苦しむ人々を助けること。

果たして、マレーヌは全ての魔歌を集め、歌姫となり、人々を救うことができるのか…?

第一話 おでこぼぼ（前書き）

初めて書いた作品です。

最後まで読んでいただけたら嬉しいです〇（ ）〇

おかしい文章＆誤字脱字、ありましたら指摘お願いします（ ）

m

でせじつべー！

第1話 おでこぼぼ

“マリアンヌ様～”

「マリアンヌ様～！」

とあたしの名前を叫ぶメイド・リア。あたしは後ろを振り返り、舌を突き出し笑う。そして、前を向いたその瞬間、

“ドッシーン”

「きやつー！」

巨大な何かにぶつかり、尻餅をついた。ジンジンする尻をやすりながら、じりじり。

「ちょっと痛いわね！」

「なんだい、ぶつかってきたのは君だろ？。マレーヌ」そ、その声は…。おやおやおやおやの顔を上げると、やつぱつ…。

「お、お父様！『めんなさい…』

すぐに謝つて、頭を下げるあたしにお父様は、「マレーヌは昔から元気だからな。元気なのはいいけど、前を向いて歩くのだぞ」

と優しく言つて、あたしの頭をポンポンと叩いた。それから、何事もなかつたように歩いて行つた。心中でホッとし、立ち上がり埃を払う。後ろから、ヨロヨロとリアが来た。

「ハアハア、マリアンヌ様、お勉強の時間です。…急に逃げ出すのは、もうやめてください」

肩で息をし、注意するリア。そんなリアに、「はいはい。分かりましたよ。それと、マリアンヌじゃなく、マレーヌって呼んで。前から言つてるでしょ？」

頬を膨らませて言つた。

あたしは風の王国の姫。両親からマリアンヌ・ペアーノと名づけられました。ある人の名前から取った名前で、『マリアンヌ』って名前も素敵だけど、あたしには似合わない。『マリアンヌ』はも

つと可愛い子に似合つもん。いつも走り回るがさつなあたしには、

『マレーヌ』の方がいいに決まってる。

「は、はい。失礼致しました、マリ、マレーヌ様」

あたしのお世話係になつて半年のリアはなかなかマレーヌという名前に慣れていない。あたしは呆れてふうと息を吐いた。

つていうか、この子に『マリアンヌ』って名前合つよね。マリアンヌに『リア』入つてるけど…。金髪のショートボブ。小柄な体にメイド服がずつしり乗つかる感じ。フリフリのワンピース着せたら、お姫様…。いやいや、あたしだつて似合つ?…し、自分が姫だつつーの!

「さつ、お勉強に参りましょ」

ズルズルと引きずられ、あたしは勉強部屋に向かつた。

今日はあたしの嫌いな魔術歴の時。いわゆる、歴史。あたしはいつも思う、昔の事を知つてもね~。新しい魔術とか魔歌（魔術の歌）とかを習いたい。魔術歴の時間はどうしても、眠くなる。また、口に手を当てて、あぐび。チラッと教科書に目をやるが、これっぽつちもやる気が出ない。今日、10度目かといえるあぐびをする。

”バシッ”

「痛つ!」

頭に分厚い教科書が…。魔術歴の先生、モダンが叩いてきたのだ。顔をしかめるあたしに、モダンはにっこり微笑んでいる。でも、頬がピクピク動いていることが分かる。おお、恐い×2。すかさず、テヘつとする。そんなあたしにモダンはため息をつき、話を続ける。『何十年にも及ぶ戦争が終わつた。戦争での死者、負傷者の数は計り知れず、世界の復興は不可能だと思われた。家族を失つた者たちも、心に深い傷を負つた。そこに現れた一人の魔術師…。マレーヌ、分かる?』

「うん、分かる。マリア・ピアーノでしょ！？」

自信満々に答える。

「正解。マリア・ピアーノは古の魔歌で、心身の傷を全て癒した。あなたの御先祖様であり、世界最強の女魔術師ね。じゃあ、今日はこれで」

モダンは説明を終えると、早々と教科書を閉じた。

「えへ、マリア・ピアーノが出てきたのに、これで終わり？あたしマリアの話なら、魔術歴ずっとするのにいー」

ガツクリ肩を落とすあたしにモダンはフフフッと笑う。モダンの笑い方はとても上品で、男の人はイチコロ。女のあたしでも、最初はドキッとしたくらい。

「続きは次の時間。次のときはあぐびはしないみたいで嬉しいわ」

モダンが皮肉っぽく言い、手を振る。教科書やノートを素早く片付け、モダンに手を振つて、勉強部屋を後にした。

「あーー、もう少しだけマリアの話聞きたかったな」

小さな声で呟く。

マリア・ピアーノは、あたしの名前の元であり、あたしの憧れ。世界最強の魔術師なのも1つあるけど、理由は2つある。

1つは名前。さつきも言つたけど、マリアの名前からあたしの名前はきている。憧れとは関係ないけど、両親がつけたマリアンヌは、マリアのようになつてほしいからつけたつて聞いた。だからこそ縁を感じる（マリアは風の王家だから全くの他人でもない）。あたしには似合わない名前だけど、結構気に入つてはいるのだ。

2つ目は、魔歌がすごく上手だつて事。

この世界に生まれた人たちはたいてい魔力を持ち、魔力から魔術や魔法といったものを使つてはいる。魔術や魔法の中の1つが魔歌。歌に魔術を加えると治癒系の魔法が働く。基本は身体の傷を治したり、心を癒したりできる。普通の人だったら、軽傷を治癒させ、心のモチベーションを少し上げるくらい。マリア・ピアーノは王家の血筋をひくといふこともあり、魔力が強大だった。だから、最高

ランクの魔術を使え、魔歌も人並みではなかつた。マリアの魔歌は一度に大勢の人の心身に負つた深い傷を治癒できる。それがマリアがあたしにとつて、憧れの存在になつた大きな理由。

あたしもマリアのよつに強くなりたい！だから、魔歌をいっぱい練習して、上手になつてやる…！

”ヒューン”

「この音は…。ふと聞こえた音はよく知つている。

「マークン！」

曲がり角から現れたのは予想通りマークン・D・ムーケ。彼は200cmくらゐの妖精であたしのお供。

「あつ、マレーヌ探したマロー！」

あたしの姿を見つけ、安堵の息をつくマークン。

「どしたの？マークン」

「オイラ、寝坊したマロ。なんで起こしてくれなかつたマロー…？」

「だつてえ…」

いつもマークン一緒に行動する。いつもなら起こしてたよ。今日のマークンの寝言、笑っちゃうだもん。

「マークン寝ながら、」「ムフッ、この栗上手いマロ～」つて言つてたのよ？起こせるワケないじやん。あんなにいい夢見てたのにいゝ笑いを堪えながら、説明するあたしにマークンは赤面。

「むむー、失態をさらにしてしまつたマロ。わ、わらうなマロー！」

あたしはもう我慢出来なくなつていて。お腹を抱えて笑つてしまつた。マークンは今までになく、顔を真つ赤にさせた。これじゃまるで、茹でダコ状態じゃない…！

「フフッ、誰にも言わないから。顔、真つ赤だよ！」

マークンはリュックから栗を取り出し、むしゃぶりついた。すると、真つ赤だつた顔は、いつものキャラメル色の肌に戻つた。そう、彼は栗を吃べるとなぜか落ち着く。不思議だよね。

「ふうー、やっぱ栗はサイコーマロ」

そんなことを、ぼやきながら、もう一つ個栗を取り出す。でも、ハツ

として首をふるなり、あたしに急いでこいつ告げる。

「忘れてたマロ。王様と王妃様が呼んでたマロよー。わつ、そんなんがらしない格好せずに、着替えてお一人に会いに行くマロ」

踏み出した1歩を止めて、

「だらしないとは何よ、だらしないとはー。」

あたしは”だらしない”と言われた事にムツとしながらも、マーロンの小さい背中を追う。

あたしが今着てるのは、水色＆白のボーダーキャミと黒いバルーンスカート。これで「私はお姫様です」と言われても、説得力ないよね。普通お姫様なら、長～いドレス着てるイメージがあるし。あたしはあんなドレス無理だけど！動きにくいし、あたしには似合いません！あたしには、こんなラフな格好が1番いい。

まつ、両親に呼び出された時、パーティーの時は一応着なくちゃね～。この格好で行くのもさすがに気が引けちゃう。

部屋に到着した。さて、どんなドレスを着れば良いのでしょうか？派手な赤いドレス？大人っぽいモノトーンなドレス？黄色の下地に花柄が描かれたガーリーなドレス？

「んん～」

「どうしたマロ？」

「どんなドレス着たらいいと思う？」

あたしの問い掛けにマーロンは、

「わうマロね…。これはどうマロが？」

マーロンが選んだのは、透き通るような水色の美しいビーチアーチレス。落ち着きがあって、柔らかな印象を与えるそんなドレス。お父様にはちゃめちゃな姿を見せたのだから、落ち着いた感じの方がいいかも。

「うん、そうだね。これにする」

あたしは手に取つて、全身が写る鏡の前に立つ。うん、いい感じ。これならあたしも清楚なお姫様に見える。そして、服を脱ぐうとし

て、ハツと手を止めた。

「マーロンへ出て行く」

マーロンは男だもん。美

「う、分かったマロッコ、あたしの微笑みこぼがつ、荒て

行つた。

「
」

着替えも終わり、髪形も整えてバツチリ。もう一度、全身鏡を見た。ドレスの袖口と裾にはフワッとしたファーがつき、全体が光りを帯びている。フンワリしたスカートは、女の子っぽいイメージを強くする。髪形はいつも通り耳上のツインテール。ゴムはいつもと違つて、ドレスと合わせてみた。水色のフワフワシュシュ。完璧で

す

11

「？」「マーロジ、ビーヴィたの？」

返事が返つてこない。マークはどこで何処か行つちゃつたのかな?

九
九
九
九

二二二

二

ドアを開ける音と何かが壊れる音
一步が踏

んっ！？

「ハルフ———」

ひこ、耳をつぶせばくよくな悲鳴。耳を塞ぐけど、その場に尻餅を

ついてしまつた

リリカル・リリカル

「あつ、やっぱりそうだったのね。あたしは、ドアの前に立たマーロンを踏ん付けてしまったのだ。

「痛いマロ～」

踏まれた顔をさするマーロン。その顔にはヒールの跡がくつきりついている。

「ごめんぬ、マーロン。返事しないからびっくりしちゃって……」

あたしは、近寄つて謝つた。そしてマーロンの頭を撫でてあげた。

「マロ～～～」

撫でられて気持ちいいのか、細い目をようじつそう細めた。

「アハハツ」

その顔に耐え切れなくなつて、あたしは笑つてしまつた。

「マレー～ス様一、大丈夫ですか～～～？」

「えつ、リア？どうしたの？？」

リアが家来を3人連れて、物凄い形相で走つてきた。リアはハアハアと息を切らして、あたしをアワアワと見回す。家来3人は槍を片手に辺りをキョロキョロしている。

「何があつたのよ？」

あたしはリアに聞いてみた。あたしもマーロンも何がなんだか分からぬ。

「何かつて……ハアハア、悲鳴が聞こえたものでハアハア……、はれえ

？」

”パタリ”

「ちょっと、リア！？」

リアがこつちに向いて倒れてきた。あたしは、支えたものの、そのまま座り込んでしまつた。

「のぼせてしまつたようです」

1人の家来がリアの顔を覗き込み、呟いた。

「本当だ～。顔真っ赤じやない」

「病室に連れて行きましょ～う。何もなかつたようですが、家来が連れていこうとした。

「ちょっと待つて。あたしの魔歌で治す！」

家来を制止させ、リアを仰向けにさせた。あたしは立ち上がり、

癒しの魔歌を歌い始めた。

疲れたときは あなたの 笑顔を 思い出しましょう

あなたの笑顔は僕の心を
軽くする

全部吹つ 飛ぶから

今日も僕は
あなたの笑顔で強くなれるんだ♪

最後の1フレーズを歌い終えたら、リアの顔はいつもの雪のような白い肌に戻つていた。あたしははにかんだ笑顔で、ペコッと一礼。ハツとした家来は物妻ハ拍手をしながら、驚いている。

「素晴らしいです！マーク様」

「みんなが上手い世へ、ヒックリです！」

۹۷-۱

褒めちぎる家来にあたしはテレテレ。

中いや、城中に響き渡つた。

二二二

そ、 そ う だ つ た わ ！ 結 構 時 間 経 つ て る よ ね ～ 。 ヤ バ い よ ！ ！ あ た し と マ ー ロ ン は 向 き 合 い 頷 く と 二 人 の い る 部 屋 へ と 走 り 出 す

た。

「えつ、マレー様！？」

「後の」とは「後へ」

一目瞭然に走り去つた。

第一話 わてな姫（後書き）

どうでしたか？

楽しんで読んでいただけたら最高です

次回もがんばりますのでアド&「メモ」お願いしますーー！

第2話 誕生日の決意

「「ンンン」」
「お父様、お母様?マーネースです」

「つむ、入つてよいぞ」「ん」

大きなドアを開けると、部屋の中の家具も床も壁も水色。真ん中には大きなてんがいつきベッド。その周りには、湖が広がっているかのよつこ、一面水。その水は聖なる水で、病弱なお母様の為にあらのだ。お母様は聖なる水からエネルギーをもらつてゐるらしい。そんなことしないで、あたしの魔歌で治せたらいいのに……。なんて考へていると、

「マリアンヌ、ひからへ来なさい」

「はい、お母様」

お母様に呼ばれて、丸い石を渡つてベッドの傍に来た。

「さあ、マリアンヌ座つて」

あたしは黙つて、お父様の隣に座つた。じつして、お父様とお母様はあたしを急に呼び出したりしたのだ。今までこんなこと無かつたから、あたしは少し戸惑つていた。

「「めんなさいね、マリアンヌ、マーロン。急に呼び出したりして」とお母様は体を起こして言つた。

「無理なさらないで」

「ええ、大丈夫よ。今日は話があつて呼んだの……。」「ホホホホ」
咳込むお母様の背中をあたしは優しくなすつてあげた。

「ありがとう。あなた、話してくださいさる?」

お父様は小さく頷くと、重い口を開け、話し始めた。

「マーネ、君も後3日で15だ。だから、旅に出てもらおうと思つ」

その言葉の意味を理解するのに少々、時間がかかつてしまつた。

「ええ!? なんで?」

あたしは時間差で驚き、立ち上がった。でも、慌てて座り落ち着いて質問した。

「一体、どういうことですか？あたしが旅に出るつて…」

「一人共、一時黙つていた。すると、

「マレーヌ、君は魔歌が好きなんだろう？」

とお父様に質問で返されてしまった。

「そうですけど…」

とりあえず答えてみたものの、それと旅に出ることは、何の関係があるというのだ？

「そして、魔歌で人々を助けたいと思つてはいる…マーロンから聞いたのだ」 お父様が続けて話し、マーロンを見た。あたしもマーロンを見た。いつの間に、そんなこと話したの！？恥ずかしいから、マーロンにしか話して無かつたのに…。

当の本人は話に自分が出てくると思つていなかつたらしく、目を見開いていた。困り果てたマーロンを見て、お父様は話を再開した。「助けたいというのならば、世界の国々を渡り、その王国に納められた魔歌を学ぶのだ。

「この世界に7つの王国があるのは知つてはいるだろ？」

「ええ、お父様」

えつと…、あたしの住んでる風の王国。火を司る、火の王国。水を司る、水の王国。花を司る、花の王国。空を司る、空の王国。闇を司る、闇の王国。光を司る、光の王国。（闇と光の王国は、幻の大地にあるといわれている。だから、本当に存在するのか分かつていい） 1、2、3… 7つあるね。そう、あたしたちの世界は、この7つの王国で成り立つてゐる。見ての通り、自然の力で成り立つてゐる、とも言える。

「7つの王国には、戦争が終わつた後、マリア・ピアーノが納めた魔歌があるはずなのだ」

「本当に…？」

びっくりして、声が裏返りそうになつた。マリアが世界各地を渡

つて、魔歌を聞かせたのは知っていた。だけど、魔歌を納めたのは知らなかつた…。違う、少しだけ聞いたことがあるよつな…？ん~、思い出せない。

「つむ。マレーヌも魔歌が上達したようだし、もう一歳だろ。こ

ういう経験も必要だからな…」

「そういうことだつたんですね」

あたしは少し納得した。未だに旅なんて信じられないけど…。お母様は微笑みながらも、時々苦しそうな表情を浮かべていた。

「それにな、二ーナの体も良くなると思つて…な」

お父様はの顔は険しかつた。しかも、お母様を名前で呼ぶくら

だもん。そんなに悪くなつたのかな、お母様…。

「あの、王様たちは言い伝えを知つて旅に出るよつ考えたマロッ?」

マーロンが質問を投げ掛けた。お父様は表情を崩して、

「ああ。マレーヌなら、言い伝えのようにできると思つたのだ。そして、アリアや人々を助けられるだらうと踏んだのだ」

言い伝え？聞こいつと思つて口を開けたけど、お父様に先を越された。

「この決断は3日後の生誕パーティーで発表してもうづ。それまでじっくり考えるのだぞ」

お父様の言葉を聞き、あたしは部屋を後にした。ドアをゆっくり閉めたら、

「…マレーヌ、どうするマロ?」

マーロンがボソッと呟いた。「ん?」と振り返りニコニコした。

「そんなの決まつてるでしょ?」

そして、ウインクをした。

「ふあ~」

「3日後~

重い体を起こして、朝を向かえた。カーテンの隙間からこぼれ落ちる木漏れ日が眩しい。

今日はあたしの誕生日。そして、決断の時である。ドキドキする。こんなにドキドキするの、15年間生きて初めてかも…。小刻みに震える体を奮いたたせ、着替えを始めた。今日は白のマキシ丈ワンピースに、ド派手なピンクのタンクトップ。髪を整えているとマーロンが起きた。

マーロンの部屋はあたしの部屋の中にある。部屋とこり、ポスト。しかも、郵便ポスト。

「おはようマロ。今日は早いマロね~」

「だつて、今日はあたしの誕生日よ。しかも、決断もしなくちゃならないし」

決断はしてるけど、こぞとなるとドキドキして早く起きてしまつた。いつもなら、朝食の15分前、リアにたたき起しあれる。

「マーロン、朝食まで散歩しない?」

今、あたしたちがいるのは”秘密の裏庭”。裏庭の中にある、小さな泉の縁に立っている。

何故ここが”秘密の裏庭”かというと…。5歳くらいの時、勉強が嫌で逃げ出したことがあった。城の裏側の囲いの一部が壊れていたのを見つけて、幼いあたしはそこに逃げ込んだ。そしたら、ここを見つけたつて訳。今じゃ、囲いの壊れたところにあたしが入ることは出来ない。でも、マーロンのリュックにあたしが入って、”秘密の裏庭”に行く。なんと、マーロンのリュック、中は本人も分からなくなるくらいたくさん入るのー。それでも、中は栗だらけで、埋もれてしまいそうになる。

まあ、そうやって何度も訪れている。都合の良いことこの辺り

に、めったに人が来ることはなく、今まで誰にもばれてない。

それにしても、ここはうつとりするほどきれい。木は生い茂り、何処からも見えず、すくすくと育つてゐる。花は生えてないけど、あたしが時々来て手入れをしているから、芝生はすつきりしてゐる。泉の水は底まで透き通つて見える。水は泉の奥にある少女の像から出でている。肌も、着てゐるローブも全て真っ白な像。あたしが見つけた時から錆び付いていない。優しげな笑みを浮かべた少女の像。目を開じて、口はほころび、胸の前に持つたツボから水が湧き出でいる。水がどこからきてゐるのかは、全然分からぬ。普通の水ではないはず。

木の間から漏れる光。それが泉に反射して、キラキラと輝いている。こんな風景を見ると、不思議と心が落ち着く。あたしは何かあるたび、”秘密の裏庭”に来る。悲しい時、寂しい時、失敗した時、もちろん嬉しい時にもここに来る。

「ねえ……」

「何マロ?」

「あつ、ごめん、マーロンじやなくてこの子」

あたしは泉の前でしゃがみ、少女の像に話しかけた。

「あたし決めたよ。この世界を旅して、マリアの魔歌を集める。それで、お母様の病氣を治して、マリア・ピアーノ^{ディーナ}_{歌姫}になる」

変な話だけど、この子に話しかけると、本当に聞いてくれてるみたいなの。

「だから、少しの間会えないからね。これ……持つてきたのポケットに入れていたものを出した。

「指輪……マロか?」

「ん……、そうだよ

水色の石^ガがはめ込まれた、おもちゃみたいなちぢやな指輪。昔、お母様から頂いた指輪。お母様はこの指輪をネックレスに通して使つていた。小さかったあたしは駄々をこねて、指輪を貰つた。お母

様が子供の頃につけていた指輪で小さめで、今のあたしも入らない。

昔は毎日のようにつけていた。

「あたしのお守りみたいな物だから、あなたにあげる。あなたに似合つと思つて」「

指輪の石にそつと触れた。今までのお城での生活を思い出す。刺激の少ない、退屈な生活。楽しい事もあつた。でも、なんだか物足りなくて…。あたしはこんな生活をずっと続けるのかと疑問に思つていた。きっと旅に出たら、色々な事が待ち受けているんだな。不思議と顔が緩んでしまつた。期待も不安もあるけど。

「マーク、これ頭にかけてくれる?」

マークに指輪を渡す。彼は丁寧に持つて行き、少女の頭にかけた。

「似合つマロ~」

マークが戻つてきて、にこやかに言つた。

「あたし頑張るからね。あたしの事応援してよ? 魔歌、上手になつたら聞かせてあげるから」

少女の像をまっすぐ見つめた。返事は返つてこない。来るはずもない。あたしは”秘密の裏庭”をぐるつと見渡し、その場を後にすることにした。マークのリュックに入ろうとした時、

「待つててるわ、マーラー~」

そう聞こえたような気がした。

（数時間後）

あと1時間でパーティーが始まる。パーティーが始まるのは6時から。あたしはドレスを着て、パーティー会場の裏でいまかいまかと、待ち構えている。

ぞろぞろ入つてくるお客様達に心臓はバクバク! もう、どうしよう。でもでも、あたしは座つて挨拶したり、プレゼントをくれる人に笑顔でお辞儀したりしてればいいってリアが言つてたもんね! ?

「はあ~」

長～いため息をはいて入り口や会場にいる人を数える。1つのテーブルに10人くらい座るから、1、2、3…つていつもより多いよね！？座ってる人まだ少ないけど、テーブルの数、やたらあるでしょー！今まで100～200人くらいなのに、500人くらい、いや、もつといいる？お祝いしてくれる人がいっぱいいるのは嬉しい。でもなんでこんなに多いのー！？

「うう～」

ため息の次は呻いちゃつたよ…。

「マレーヌ、そんなにため息とかうめき声をあげないの。せつかくあなたの為に来て頂いてるのに」

モダンに注意された。ビシッと女性用のスースを着て、キャリアウーマンみたい。

「そうですよ、マリ、マレーヌ様。ほらあ、こいつ笑つて～」

リアはそう言つと、あたしの顔をグイーッと…

「痛い、痛い！」

引っ張つたの！

「はっ、すみません～」

「いいのよ、リアちゃん。もつといつやつて～…」

やつとリアが離してくれたのに、モダンがあたしの顔をグイーッと…、

「い、た、い、ー！」

さつと後退し、つねられた両頬をこする。

「モダンは手加減つてのを知らないのよー！」

「知つてるわよ～。手加減くらい」

「まあまあ、マレーヌ様～。落ち着いて～」

「ていうか、あんたが始めたんでしょーーー？」

「あれえ～、そうでしたっけ？」

リアの天然ボケに、怒りも自然消滅。

「そうよ、リアよ」

呆れた感じで言つた。でも、リアは呑気にアハハなんて笑うし、

モダンはいつもの上品な笑いで…。なんなのよ~。そんなこんなで会話をしていたら、

「マレーヌ、もうそろそろ席につくマロ」

タキシード姿のマーロンが現れてうながした。深呼吸をして、2人に手を振り、会場に出て玉座に座る。会場にいる人たちも席に座り始める。あたしは真ん中の玉座に、お父様は右、お母様は左の玉座に座ってる。マーロンは相変わらず、あたしの横でフワフワと宙に浮いている。

「うー、緊張する。目で人をもう一度数えてみる。1、2、3、4、5…、数えきれません! こんなに沢山の人の前で「旅に出ます」なんて言わなきゃならないの?

「大丈夫マロ? 顔引き攣つって、頬つぺた真つ赤マロよ~」

マーロンが耳元で脳天気に囁く。あたしは口に手をあてて、身を少し乗り出す。

「大丈夫じゃないわよ! こんなに大勢いるのよ、緊張するわ~」
あえて、頬つぺたが真つ赤…ということには触れなかつた。

「あら、マリアンヌどうしたの? 大丈夫?」

「え? 大丈夫ですよ、お母様!」

慌てて言つた。今のあたしは矛盾してるね…。お母様はにっこり微笑み、隣のメイドに話し掛けた。あたしはマーロンに肩をすくめてみせた。

「まつ、なんとかなるわよ…」

そう言つて前を向く。と同時に、

「皆様、お集まりのようですので、始めさせて頂きます。司会は私、モダン・S・プレッソでござります。よろしくお願ひ致します」と言つて(え!?)モダンが一礼する。それに合わせて、お客様は拍手をする。

「では、これからマリアンヌ・ピアーニ様生誕パーティーを始めます。開会のお言葉をウイン王」

すると、お父様が立ち上がり、前方のマイクのところまで歩み

寄り、マイクに向かつてこう言つ。

「ええ、本日はマリアンヌの生誕パーティーに来て頂き、誠にお礼申し上げます。マリアンヌも今年で15歳となりました。これも皆様方のおかけであります。では、本日の一夜を楽しんで下さい」「一礼して席に戻る。なんだか、圧巻。ただ一言、言つだけなのに、威厳に満ち溢れている。あたしもお父様の様にできるかな…？」

「ありがとうございます。次に、記念品の贈呈を致します」「スッとあたしは立ち上がり、前に出た。お父様とお母様も前に出て、あたしと対面しきになる。2人の横にメイドがついた。その手に、長方形の小さなトレー。中にはシンプルなチョーカーが置かれていた。黒い帯に金色のプレート。真ん中にはダイヤ形のクリスタルがはめ込まれてある。クリスタルは風の王国の『証』といわれる宝石。他の王国にも、王家の『証』とも言える宝石があるらしい。

あたしが『証』を貰えるなんて…、嬉しい…いつ貰えるのか、ずっと気にかかっていた。いつあたしが風の王家として正式に認めてもらえるか。ついつい、顔がほころんでしまう。2人もあたしと同じよひで…。

「今ここに、お主を風の王国の、立派な王族とする。如何なる時も風の王族ということを忘れるでないぞ。よつて、この品を授けよつ」お父様がそう言つて、お母様があたしの首にチョーカーをつける。「ありがとうございます」

あたしはお客様に向かつて、ドレスの裾を持ち、左足を後ろに下げ、お姫様の様な（あたしはお姫様です）礼をした。そして、大きな拍手が起こる。あたしの顔はたちまち笑顔。拍手が鳴り止んだので、席に戻るうとした。

「マリアンヌ様、そのままお待ちください」「司会のモダンにとめられた。…な、なにがあるの…?」「引き続き、マリアンヌ様から重大発表がございます。マリアンヌ様、どうぞ」

ええ、今…?まだ心の準備が…。どんな風に言えばいいの…?ス

タンドマイクの前でロボット状態。えつと、ます…、

「えー、^{わたくし}私マリアンヌ・ピアーノは…た、旅に出ます！」

ちょっと声大きすぎたかも…。みんな、引き気味だし…。

「えつと、何故旅に出るかと言いますと…、世界中の魔歌を知り、学ぶ為です！」

なんか選手宣誓してるみたい。しかも、語尾が強くなる…。

「そして、体の弱いお母様や世界各地の人々を元気にします…、「

やつぱり語尾が…、でも、気にしちゃいられない…」

「それから、マリア・ピアーノみたいな^{ディーバ}歌姫に…ううん、マリア・ピアーノを越える歌姫になります！見ていて下さい…！」

なんか、すつきりした…？そして、今までにない拍手が会場全体に響き渡る。時々、歓喜の声も聞こえる。もつ人目気にせず、あたしはみんなにペコペコ頭を下げていた。嬉しそぎて、目頭が熱くなる。唇を噛み締めて、満面の笑みを零す。

「皆様、ありがとうございます。それでは、乾杯のお声をマリアンヌ様。皆様、お立ち下さい」

モダンが頃合いを見計らって、進行をした。あたしはメイドからジユースの入ったグラスを貰い、マイクに向かつて高らかに声をあげた。

「皆さん、今日はありがとうございます…かんぱーい…！」

【かんぱーい…！】

それからは食事をしたり、プレゼントを貰つたりしてパーティーは終わつた。今、あたしは自分の部屋のベランダにいる。マーロンと、パーティーやが終わつてからずっとここで星を眺めている。

「ふう。パーティーも無事終了だね」

さつきまで帰路につく人々がいたけど、今はもういない。

「そうマロね～。マーネスもよくやったマロ～」

「あはは。でも、重大発表つて言われた時はびっくりして、頭真っ

白になっちゃった

「いや～、それでも大したもんマロ～。自信持つマロ

「うん。ねえ、マーロン?」

あたしはマーロンをまっすぐ見つめて切り出した。

「どうしたマロ?」

「あのね、マーロンも一緒に旅、行ってくれる…?」

あたしの言葉にマーロンは目を見開いた。そして、顔をくしゃり

として、

「もじろんマロ? オイライはマーネスの忠実なお供マロ! 行かないなんて、ありえないマロ!」

あたしは微笑んだ。

「良かつた。マーロン、頑張ろうね。あたし絶対に、みんなをあつと驚かせるよ! うな、すゞこ^{ディーバ}歌姫になるから…」

あたしはこの数多の星の下で一つのとでもちつぽけで、とても大きな決意をした。

第2話 誕生日の決意（後書き）

わあやっヒマーネヌたちが旅に出ますー。

リリルで読んでーわっ あいがといひじれこわす 三 (< >) 三

続お楽しみこーーー！

第3話 風の奴へ（前書き）

かなり遅くなりました。すみません（ - - - - ）

やつと旅立ちつて感じです。

おひるねおへつ

第3話 風の如く

”ゴソゴソ”
あたしは重いまぶたをゆっくり開け、体を起こした。生誕パーテイーから3日。今日がとても早くきたような気がする。
どうしてかな…。ワクワクする。沢山の魔歌を学べるから?冒険の旅(?)に出られるから?なんだか、色々な気持ちが“いや”ませだよ。

「マーレース、おはよマロ～」

「あっ、おはよう

既にマーロンは起きていたようだ。荷物の中を確認しながら、あたしに聞いた。

「ちゃんと支度出来てるマロか?」

あたしは自信満々に、

「大丈夫よ!バツチリ、バツチリ」

と言つてベッドから勢いよくジャンプした。そんなあたしの姿にマーロンは呆れた感じで、

「やつマロか。…もう朝食の時間マロ。食堂に行くマロ～」

「はいはーい

返事をして、彼の後を追いかけ食堂へと足を速めた。

食堂(大きなテーブルが3つ並べられた、食事をする部屋)には、家来やメイドが沢山いる。大体は座つてゐるけど、食事係のメイドはいそいそと準備をしている。

あたしが座るのは、真ん中のテーブルの一番奥。あたしや両親、マーロン、城のお偉いさんは決まってこい。お父様とお母様はもう座つていた。

「おはよマロ、おはよマロ、おはよマロ

「おはよマロ、おはよマロ

あたしとマーロンの挨拶に一人も返した。しかし、お父様が顔をしかめて、

「なんだ、今日もネグリジエのままか」

「あつ、忘れてた。えへへ」

「もーがつくのはいつものことだから。

「ふふ、マリアンヌたら。これで何度もかしら」

お母様はくすくすと笑ってる。うう、着替えてくれば良かつた。ぶすっとした顔で椅子に座る。

今日のメニューは、クロワッサンにポタージュにサラダ。結構いいメニューじゃない。もう揃ったかな?すると、お父様が立ち上がって高らかと告げる。

「皆のもの、今日も新たな1日が始まった。それでは、1日のエネルギーとなる朝食をいただこう。いただきます!」

【いただきます】

みんなが口を揃える。そして、朝食を食べ始める。ガヤガヤと話し声が聞こえる。これも当分聞けなくなると思うと、ちょっと寂しい。それにこれからは、朝食もなにもかも自分で準備しなくちゃならないのよね。あたしできるかな…。

「あら、どうしたの、マリアンヌ?食べなくって?」

お母様が心配そうに尋ねる。

「へ!? 食べます、食べます!!」

あたしは慌てて答えた。お母様はあたしを見てこいつ微笑み、食事を再開した。

クロワッサンをほりほりながら、お母様の食事の量を見つめた。サラダとスープだけで、どれも少量。あたしなら絶対足りない。朝食だけではない。3食いつも少ない。時々、食べないこともある。しつかり食べたほうが元気になると思う。そのことを話すと、「私のこと心配してくれるのね。ありがとう。これから、もう少し食べられるよう頑張るわね」

お母様はそつと答えた。なんだか、照れ臭くなつて食べる手を速

めた。会話まじりの楽しい食事は終わつた。

食べ終わってからは自由だから、あたしはマーク共に食堂を後にした。と後ろから一つの影が近づいてきた。

「マーネ、ちょっと来て」

「はぐはぐ、マレークしゃま早いでふね（マレーク様早いですね）」

「モダン、リア！」

呼びとめたのはモダンと口の中に朝食をいつぱい詰め込んだリア

た
二
た

アーバン・リード

「人情往来」

モダンが急かした。一体何をするつもりだろう？

連れられたのはなんの変哲もない部屋。城には数え切れぬほど部屋があり、使われていない部屋がほとんど。この辺りはあまり使われてないはず。

「開けていいわよ」

モダンが肩をポンと叩き、微笑んだ。何?と顔をしかめたけど、モダンもリアも微笑んだまま。マーロンと顔を見合わせ、扉を開けた。

朝田が照り輝き、目を伏せた。目が慣れてくる。

ハニーラニソのロハニシテジ 聞ル一

部屋の中心にドレスみたいな服が飾つてある。ドレスみたいな服つてのには理由がある。ドレスにしてはシンプルな柄に布地。裾にフリンジがついてるだけで飾り気がない。肩に頑丈さがムンムンする、黒い肩当て。腰には茶色のベルト、スカートの両側にポケット。

特徴的なのは2つ。1つ、袖が肘まででそこから先はアームカバーになってる。着たら肌が見えるね、これは…。2つ、スカートの縦一直線にジッパーがあしらわれている。シルエットはドレスで、全体的にはシンプル。しかし部分的にいうと斬新。

「素敵でしょ？」

モダンが部屋に入つて来て言った。まっすぐドレスを見つめている。

「すつごく素敵！！これどうしたの？」

あたしは率直に感想を述べた。といつも、ドレスに心を奪われている。

「んふふー、私とモダン先輩で決めたのですーー！」

リアが胸を張つて答えた。

「マレーヌ様の旅で着ていただこうと思いましてーー先輩、ナイスグッドでしたねー！」

いつものあたしなりお調子者のリアにジッパーを入れる。でも、今は目の前のドレスしか頭に入つてこない。

「マレーヌ、このドレス見たことない？」

興奮気味のリアをよそに、モダンが聞いてきた。確かにどこかで見たことあるのよね。たしか…？

「マリア、マリア・ピアーノのドレスマロねー！」

やつと思いつ出して、言おうとした。なのに、誰かさんに先を越されてしまった。モダンは少しも気にせず、

「そう、マリア・ピアーノの肖像画…覚えてる？」

「あー、ほんとーーー！」

お城に偉人たちの肖像画があるけれど、マリアのは一際大きな肖像画なの！あたしは何度も見ているから、すみからすみまで覚えている。

「こちらのドレスはマリア様が着ておられたといわれて…」

「えつー？マリアがーー！」

「いえ、実際着ていたものではありませんよ。マリア様のドレスと

似せて作ったのです

「しかもオーダーメードね」

「心が惹かれるわけだわ。

「このドレス、パーティに着ても大丈夫だし、普段はこのを開けて…」

モダンがジッパーを開けてみせた。

「動きやすさも抜群よ。お転婆のマーレーヌに持つてこいね」
パツと顔を輝かせて、ドレスをマネキンから外す。体に合わせて、
ギュッと抱き寄せた。

「お気に入りになつたみたいで良かったわ

「やつぱり私たちのチョイス最高でしたね」
モダンとリアが嬉しそうに言葉を零した。

「ありがとね！モダン、リア！…」

あたしは笑顔で感謝した。

「マーレーヌ、もう時間よ早く準備して来なさい」

モダンが腕時計を見て、呟いた。

「え、うん！マーロン行くわよーーー！」

部屋を飛び出した。

「じゃじゃーんー、どうマーロン、素敵でしょ？」

部屋に戻つたあたしは早速ドレスに着替えた。似合つていいか不安だったので、マーロンに聞いてみた。平凡なあたしにこの素敵なドレスが不釣合になつてないかなつて…。

「おお、似合つマロー。モダンさんが言つてたマロナビ、ドレスの中に服を着ておけばいいって」

「ふつふーん、完璧よー。着てるもん

得意げにサインを見せつけた。

「それでこのジッパーを開けたらいいんでしょーーー？」

「そつマロー。何で分かつたマロ？」

「ん、女の勘つてやつ?」

薄手で通気性のよさそうなこのドレス。中に服を着てもあまり暑くならない様だ。ジッパーをあさるなどしてあかないとマズイ。

「ふーん。つてこつか、時間無いマローネー。」

マロウ!

「オ、オッケー、マロ！」

慌ただしく部屋を出て、廊下を駆け抜けた。

「ふう、どうにか間に合つたみたいね」

卷之三

少し息を切らせつつ、とうにか時間に間に合った。お城の前にたくさんの人が並んでいる。両親、リア、モダン、他に家来やメイド（リアもメイドだけ…）がいる。みんな、あたしの為に来てくれているんだなと思うとジーンとする。

「わあ、出発の時間のようだ……。マーネ、これから旅は世話をしてくれるメイドはおらずで、自分の力で一歩一歩進み、魔歌をしつかり学んでくるのだぞ」

「はい、お父様。あたし、頑張ります!」

威厳に満ち溢れたお父様をきみこと抱きしめ、笑顔を見せ、お母様の方を向いた。

から

「ええ、楽しみにしてるわ、マリアンヌ。あなたも無理しないでね。頷いて、お父様と同じく抱きしめた。細く骨張った体から優しい温かさが伝わってくる。

「ふえーん、マレーヌさまあ！私のこと忘れないでくださいねええ
「リア、泣かないでよ～。あたし頑張るから、あんたも頑張つてよ
ね？」

お母様から離れるとすぐ後ろに泣き縋るリアがいた。

「ふあい、マレー又様応援していますう上

「もつりアちゃんたう…。マーネス頑張りなさいよ、あなたなら絶

対できるわ……」

モダンはリアの頭を撫でながら、急に耳元で囁いた。

「闇の王国は気をつけなさいよ。あそこには悪魔や魔物といつた邪悪な奴らがいるって伝えられてるから…行かないほうがいいかもね」

「う、うん。分かつた。」

憲
典

した

して、声を張り上げてみんなに伝えた

「一ノ山城」

あたしはみんなに背を向け、歩き始めた。隣には頼もしいお供：

マーロンがいる。

清々しい風が頬にあたり、二つに結んだ髪がフワリとなびく。颯爽と駆け抜ける風はあたしの心の不安を吹き飛ばしていくような気がした。

お城が見えなくなり、町中に入つた頃、

「マーネ、まだビリの国に行へマロ?」

卷之二

マニマニ正解を飛んだ状態で、二二二ヶの甘樹地帯いた。

「ありがとう。どれどれ~?」

あたしたちがいるのが風の王国。7つの王国に行かなきゃならないのよね。7つの王国で成り立つているって言つたけど、小国もある。戦争で残つた、王国とまではいかない小さな国のこと。地の国・

木の国・岩の国・塩の国がある。だから、7つの王国と3つの小国の計10国で成り立っている。でも、7つの王国を旅つていわたから、小国に行く必要は無い。

風の王国の南に、火の王国が、西に水の王国、そのまた西に花の王国。ひとまず、火の王国に行こう。そうすれば、火水花…つて行けるからね。空の王国はこの4つの王国がある大陸とは違つ、空島という浮き島にある。そういうことで、空の王国にいくなら、
スカイアイランド

片手を空に向かって突き上げた。

「口」から「力」で「行動」する

「アハハ。んじゃ、直行で行くわ。マーロン、スクリタリ、あたしの行動に驚いたのか、裏返つた返事が返ってきた。

て
！
！

スクーターは屋根つき、高性能バイク。通常は手のひらサイズの力プセルになつてあり、投げるとバイク状になる。便利な乗り物で訓練すれば10歳から乗車可能だ。

ロマティック

ポケットの中を探ると、

「あつた！マーロン天才～～（？）」

卷之二

カプセルを地面に向かって投げる。ボワンと音を立てて、スクーターが現れた。シルバーにラメがかかり光沢のある車体、金色の屋根。屋根は収納できてホント便利。あたし愛用のスクーター。

一 もあ、行くわよー！乗った乗った！！

マーロンは露骨に嫌な顔をしていた。なんでだろ？いつも乗つてゐるのよ。

「大丈夫、大丈夫 いつも安全運転なの知ってるでしょ？」

「…かくのマツヒ」

「ん?なんか言つた?」

「な、なーんにも言つてないマロー」

あたしは気にしないでエンジンを入れる。

ブオーニン

短いエンジン音が微かに

「アローネー」
「アーネー」
「アーネー」

喜びの声と絶叫の声が見事に重なる。街中だというのに、容赦な

吹きつける風が頬に当たつて気持ちいい～～！髪がバタバタと靡

いているけど、全く気にしない。

-8-

あたじの體に纏つて、『まめだな二女』のアーロン。

「今田のうちはつよひ、スピード上げるわよーーー。」

アケセルを思い切り踏み込み、加速

一八二二年正月一日

火の王国まで風の如く！！

35

第3話 風の如く（後書き）

ほんと旅立ちつて感じでしたよね？前フリ長くてすいません（――）

最後まで読んで下さりありがとうございました（――^――）

次話も温かい田舎で読んでいただけたらうれしいです（^――^）

プロローグ 旅立ちにあたつて

あたしにはお父様とお母様という素敵な家族がいる。

残念ながら、あたしは一人っ子。

だから、兄弟が羨ましくなるときが度々ある。

双子なんかとびきり素敵じゃない！？

お互いのことが分かつて、

ケンカもするけどその分仲がいい。

そんなものに憧れたりする。

この旅でどんなことが待ち受けているのか、あたしもマーロンもわからない。

初めて踏む地、火の王国。

きっと火のように熱い意思を持つ人が待っていて、

炎のように熱い試練が待っているんだ。

そんな火の王国の魔歌は火のように心を熱くするような力強い魔
歌なんだろうな。

第1話 新境地と過去（前書き）

ついに火の王国に到着！！

そしてマーネの過去も明らかに…？

『おひつじのアーヴィング』

第1話 新境地と過去

「ふう～、なんとか火の王国についたわね～」

「散々な目に遭つたマロー！」

「本当！なんだつたのかしら、あの変な人たちは！？」

「なんで散々な目にあつたかって言つと…

まだ風の王国の領地にいた頃。街から離れた森の中。火の王国に行くにはこの森を通過しないといけない。そんな森での出来事。

「もうそろそろ、昼食にする？」

スクーターでゆっくり走つていたときにあたしは声を掛けた。

「ご飯マロ～～」

丁度いいところに切り株を見つけたのでそこで食事することにした。切り株に布を敷き、持つてきたパンやサンドイッチを広げた。バターの香ばしい香りが食欲をそそる。コップに水を注ぎ、

「「いただきま～す」」

と手を合わせ、手を伸ばしたとき、

「待て待て、待てーー！」

野太い男の声がした。声のしたほうを見ると、見るからに変な3人組が居た。

「お嬢ちゃん、そのパンとサンドイッチオレりに全部ちょうだい

い

がつしりした豚つ鼻の男が猫なで声で言つた。待てと言つたのもこの男だろう。

「…あんたたち何が用？これから食事だから」

あたしは軽くあしらつた。せっかく食べられると思ったのに…！

「あ？オレ様の名前は…」

「誰もあんたの名前なんか聞いてないわよ…」

勘違いな男だ。食と書かれたダサいTシャツは大きなお腹のせい
でパツツパツ。

「いや、聞けよ。オレ様の名は、コッペ・ラハだ！」

黄色い長靴をダダンと踏み鳴らす。ポーズまでつけてる。そして
両隣の二人が、

「おらはチヨーウだ

「おだはナノレスだ」

格好が同じ二人はきっと双子だろう。左右の泣きぼくろ以外顔は
瓜二つ。二人とも黄緑と黄色の服を着ている。黄色の魔女帽をかぶ
つて、可愛い感じもする。まあ、変な三人組だつてコトは変わりな
いけど。あたしは声に出して三人組の名前を言つてみた。

「…、コッペ・ラハにチヨーウにナノレス？」

「コッペ・ラハって逆さに読むと『ハラペコ』マロ」

あたしは少し考えてパツとある言葉が浮かんだ。

「3人合わせると…『超ハラペコなのです』じやん…つけん~、
どんだけお腹空いてるの…！」

あたしとマーロンは吹き出してしまった。

「わ、笑うんじゃねえ！いいからそれ全部よこせ…！」

「よこすだ！」「よこすだ！」

ハラペコ三人組がじりじり近づいてくる。

「ちょっと近づかないでよ！あんた匂うのよー」
ツンと鼻につく匂い。

「おらか？」

「違う！」

「おだか？」

「違う！」

「オレ！？」

「オレ！？」

「そうよ、あんたよ！…」

あたしは鼻栓をして顔をしかめる。マーロンなんか天狗みたいに
鼻が長いから両手で覆い隠している。

「あんた、何日お風呂入つてないのよー。」

「えーと2ヶ月くれえだな！」

皿邊げに言つ口ッペ・ラハ。

「うげえ。マーロン、やつちやつていい？」

「問題ないマロー」

氣樂に言つマーロン。悪臭に顔をしかめているけど。

「よしひ、こくわよー。 風よ、嵐のよつて吹き荒れ悪事を飛ばせー！」

「ゴオ—————」

嵐のよつな風が吹きたて、周りの木々やあたしの服も髪も音を立てる。マーロンは食事の上に伏せて、お気に入りの麦わら帽子が飛ばないよひ、両手で押さえている。ハラペコ3人組はとぼけた顔で辺りを見渡す。すると、フワリ。3人組の体は浮かび、風と共に飛ばされていった。最後に捨て台詞を残して…

「覚えてるよお————！」

「ハラペコ、グ—————」

「」

「ひひひひ。ほんつと散々な目に遭つた。あいつらは一体何者だろう？変人なのは分かつてるけど…。」

「こんにちわ！身分証明書を出していただけますか？」

突然の声。ここは入国ゲートだった。他国に入るときは、入国ゲートを通つて入国手続きをしなくちゃならない。じゃないと犯罪になるからね。手にしていた証明書を手渡す。メモをとりつつ、係員が質問を始める。

「風の王国からこられたのですね。ええと、マリアンヌ・ピアーノ様に、マーロン・D・ムーケ様ですね？」

「はい、そうです」

「おわーつてことはあなた様は風の王家の者でしたか！？」

めぢやめぢや驚いてるし…。

「そうですけど…」

「はっすみません。なんの御用事で？」

「んつと、なんていつたらいいのかな？」

「魔歌探しの旅つてところマロ」

マーロンが補足する。係員は素早くパソコンを打ち込み

「そうですか。それではこちらの入国証を。紛失しないようにお願

いいたします。後、こちらを

渡されたのは入国証と何かのパンフレット。

「ありがとうございます。これは何ですか？」

「こちら、火の王国で年に一度開かれる、不死鳥パレードのパンフ

レットになります」

「へえ、パレードとかあるんだ」

係員がにこやかに頷く。

「では、お通り下さい。スクーターにお乗りの場合、速度には気を

つけて下さい」

「はい。行くわよ、マーロン」

「待つてマロ」

胸を躍らせながらゲートを通った。

「へえ、ここが火の王国！素敵！」

そう、目の前に広がったのは赤とピンクの家並み。家の外壁は淡いピンク。屋根は真っ赤。道路は茶色というより、赤茶色。まさに『火』つて感じ。行き交う人々は活気溢れている。車や馬車が列を成している。

「さあ、火の城まで飛ばしていくわよ」

「スピードの出しすぎには注意つて言われたばつかマロ！」

「わかつてゐつて…」

スクーターで走ること20分。赤を基調とした大きな城に着いた。

「風の城と同じの大きさね～」

「王様に挨拶した行へマロー。」

「そうね。といつさてマリア・ピアーノの魔歌、探し出すわよー。」

門の前まで来ると、門番に足止めされた。

「お前たち何者だ？」

「何のよつでここに来た？」

槍を片手に遠ざせまいとする。面倒だけど、これが彼らの仕事だからね。

「あたし、風の王国から来ました。マリアンヌ・ピアーノです」
「お供のマーロン・D・マーケマロ。王様に挨拶をしに来たマロ」
あたしたちが名前を名乗ると、顔色を変えて後ろで「よ、よ、よ」とし始めた。

「…マリアンヌ・ピアーノって」

「…風の王家じゃねえか？」

丸聞こえなんだけビ…。そんなことも知らずに、前を向きたつをと違う態度で、

「…マリアンヌ様とお供様ビ、」

声をそろえて言った。

中に入つて案内され、王室の大きなドアの前に立たされた。

「…王様と王妃様がおられます。わたくしはこれで」

「…クンと息を呑み、

「さあ行くわよ…」

「マーレース、ドレスのチャックは閉めた方がいいマロ」

うんうんと頷き、アタフタとチャックを閉める。

「マーレース、焦り過ぎマロ。落ち着くマロ」

大きく深呼吸をし、ゆっくりドアを開ける。王室は鮮やかな赤茶色の大理石を敷き詰めた豪華な部屋だった。シャンデリアはなく、ランプを使用している。そう思えば、廊下・階段もランプやつだつだ。火の王国だから火を使う方がいいのかな？

それはともかく、奥には横に広がる階段。一番上に玉座があつて

王様と王妃様が座つてゐる。

「あたしはマリアンヌ・ピアーノと申します。このお供のマー
ロンです」

「もうかとうか、ピアーノ…。風の王家のものではないか。いやあ
～遙々とようこむ～」

「マリアンヌさんつて先日15歳になつて誕生パーティを開かれた
のよね。おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

なんだかこの2人面白い。2人のペースで流されてる気がする…。
自然と笑顔になるけど。

「うむう、マリアンヌ姫そなたどうして我が火の王国に？」

「あら、あなた知らないの？」の子はこの世界の魔歌を探して旅し
ているのよ」

「ふむ、それは大変だの～」

息ピッタリだなこの2人。会話がどんどん進むもの。そしてあた
しは本題にもつていいくことにした。

「それで…、魔歌、ありますか？」

「魔歌があ、マリア・ピアーノの魔歌、うう～む何処にあるのだろ
う…ううむ…」

「もしかしてないマロか？」

ずつと話に入れなかつたマーロンが口を出した。王様がまたうめ
いて、

「んん、何処にあるのかわからぬのだ。かなり昔に納められた魔歌
で、城に納められた訳ではないのだ。探すように命じるので、少し
の間待つて下さるか？数日掛かるかもしけぬから、部屋を手配させ
よ～」

「分かりました…」

あたしはちよつとがつかりして返事をした。

「メイドー、この子に部屋まで案内してちょうだい

王妃様が声をあげると、メイドが1人現れた。

「『』案内します。ビーチリゾートへ

「あつはー。お願ひします」

あたしは微笑んでメイドの後に続いた。マーロンも慌ててついてく。

部屋まで案内したメイドはこう言つた。

「ここがマリアンヌ様のお部屋になります。お食事は時間になると、お届けしますね。何かありましたら、お部屋のお電話をお使いください。失礼します」

そのまま、仕事に戻つていった。あたしはズカズカと部屋に入り、ベッドに腰を下ろした。

「ふうー、やつと着いたと思つたのに、肝心の魔歌の居場所が分からぬいなんて……」

「まあ、そんな簡単に見つかるわけないマロ。ほら、マーレーヌ荷物マロ」

マーロンは気楽に言つて、自分の小さなリュックからあたしの荷物を詰め込んだキャリーバッグを取り出した。あたしはそれをベッドの横に置いた。

そして、ポケットから小型の機械を取り出した。これは通話機能、メール機能、カメラ機能、メモ機能など多種の機能がある機械だ。名前は『マイコン』（マイコンピューターといつそのまんまの名前）。マイコンで何をしようかといつと、

「風の王国に連絡しとくわね。」

あたしのマイコンはタッチ式のスライド型。最新型で高性能だから、すごく便利。あたしの生活にマイコンは必須だわ。アドレス帳を開いて、風の王国をタッチする。すると、発信中となつてすぐに通話中の画面になつた。

「もしもし？あたしマーレーヌだけど……」

『マーレーヌ様ですか！？リアですか。お久しぶりです！』

「リア？全然久しぶりじゃないわよ。まあいいけど…。とりあえず火の王国についたわ。でも、魔歌はどうにあるかまだ分からなって」

『「そうですかあ。マリア・ピアーノ様の魔歌となるとそう簡単に見つかりませんよねえ』

リアの声が耳に残る。なんだか体が浮かぶようなフワフワした声。リアって不思議だねえ。

リアってきしゃな体してるので意外としつかりして、みんなから好かれてるし。

お姫様みたいな外見してるし。

リアって名前はマリアから2文字取つただけだし。

なんだか違う意味で憧れる。ん？リア…マリア…マリアンヌ。あれえ、すつごい名前が似てるんだけど…ややこしい。あたしの名前は、両親がマリアみたいな偉大な人になつてほしいって願いがあるらしいけど…。

「ねえリア？関係ないけどさ、リアの名前ってどういう意味でつけられたか知ってる？」

ふと、疑問が浮かんだので聞いてみた。リアとは長くおしゃべりをしていない。あたしの話し相手って限られてたからな…。昔はあんなだつたから…って違う違う。

『どうしたんですか？急に』

「え？えっとリアってマリア・ピアーノと名前似てるじゃん？あたしもマリアにちなんでつけられたから、どうしてかな…って」

あたしは素つ頓狂な声を出してしまった。リアは気にせず、昔話のよう語った。

『「私が田舎住まいなのは知っていますよね。昔、私の村にマリア様が訪れたそうです。祖父母が幼いころに会つたようでした…。マリア様に憧れたんでしょうね。私の名前は祖父母がマリア様にちなんでつけられたらしいです』

リアの声はどこなくしんみりしていた。たぶん、祖父母はもう

他界していたはずだ。ちょっと悲しい想いさせちゃったかな？

『マーレーヌ様、どうされました？』

「ううん、ありがと。教えてくれて。とりあえず、お父様とお母様に伝えておいてね。よろしく。なんかあつたら、また連絡するわ、

バイバイ』

『かしこまりました。応援しております！！失礼します』

通話を終えた。リアの村にマリア・ピアーノが行つたんだ。リアの住んでいた村は分からぬけど、きっと幸せなところだつたんだろうな。リアがあんな雰囲気だから、村の人も家族も周りの人々がいい人たちばかりなのかも。

「マーレーヌ、どうだつたマロ？」

「リアに伝えてもらつたわ。ちょっと話もできたし」

「そうマロか。リアさんは昔からマーレーヌと仲良かつたマロね。なんだか、楽しそうに話してたマロ〜」

「そう？まあ、リアと話してると、体がフワフワ〜つてなるのよ。不思議と眠くなつてきたし…。マーロン、あたしちょつと寝るから

…

長旅の疲れがどつと眠気となつて押し寄せてきた。マーロンの返事を聞かないうちに、寝息を立てた。

『ワーハイ　　キヤ〜〜』

『じこからともなく、楽しそうな声が聞こえてきた。

「はれ〜じこじこ〜」

目をこすりながら、回りを確認する。ぼやけた視界に映つたのは、(公園？)

あたしがいたのは小さな公園。しかも、見覚えのある公園。水色のブランコに緑色の滑り台、大小の鉄棒、オレンジ色のジャングルジム。

(じじひて…)

そう思つた瞬間、1人の男の子がこっちに向かつて走つてきた。ぶつかる! 避ける暇もなく、男の子とぶつかった。と、思った。しかし、あたしの体を通り抜け、笑いながら走つていった。疑問に思つたあたしはすぐ、自分の体を見た。ちゃんと体はあるけど、透けてる! ? パニックになり、辺りをキョロキョロ。鬼ごっこをしている子供たちの体は透けていない。

(どうして?)

もつとよく見ようと、ブランコをこいでいる1人の女の子を見た。え、あれって…。そんなわけないと思つたけれど、間違いない。その女の子は、紛れもなく“あたし”だ。6~7歳の“あたし”みた。いだ。小さな“あたし”は鬼ごっこをしている子供達を羨ましそうに見つめている。

「あっ、思い出した」

ふとよみがえつたのは寂しい記憶。今になつてこんな記憶を思い出すなんて。2度と思い出しだくなかったが、リアと話していた途中にふと脳裏をよぎつたのだ。

そんなときに“あたし”がブランコから降りて鬼ごっこをしている子供達に歩み寄つて言った。不安そうだけど、決心のついた眼差しだった。行っちゃ駄目! 手を伸ばして叫んだが、届くはずがなかつた。これはあたしの記憶。変える事などできるはずがなかつた。

「ね、ねえ…」

“あたし”が男の子に近づいて言った。

「わ、私も一緒に遊んでもいい?」

手を後ろでゴソゴソさせながら、勇気を振り絞つて呟いた。その途端、楽しく遊んでいた子供達が、立ち止まって小さな“あたし”をじつと睨んできた。あたしも小さな“あたし”もびくつと体を震わせた。子供達はヒソヒソ話をしていやそうな目で睨んでいる。

目、目、目、め、め、メ…

怖い、こわい、こわい、こわい、コワイ、コワイ、

- -

“あたし”が声を掛けた男の子が口を開いた。

「お前は駄目だよ！母ちゃんが言つてたもん。お前に怪我させたら連れてかれるつて」

小さな“あたし”は田にいつぱい涙を溜めている。それなのに子供達は容赦なく、“あたし”にきつい言葉を投げつけてくる。

「お前なんか、自分ちのメイドと一緒に遊んでればいいんだよ！」

「そんな高級な服着て、私たちに見せ付けてるんでしょ！」

「そうよ、そうよ。あんた、自分がお金持ちだからつていい気にならないでよ！」

きつい言葉に合わせて、「そうだ、そうだ」とか、「あっち行けよ」と言つて“あたし”を傷つける。小さな“あたし”は体を震わせて涙を流している。

やめて、やめテ、ヤメテ、ヤメテ、ヤメテ、ヤメテ

『お前なんか大嫌いだーー』

あたしの心に、小さな“あたし”の心にグサリと音を立てて突き刺さる。

ネエ、アタシ何カ悪イコトナシタノ？ネエ、ドウシテ？

第1話 新境地と過去（後書き）

こんな悲しい過去があつたなんて！！

と書きながら思いました。。。

最後まで読んでいただきありがとうございます（・・・）

次回もよろしくお願ひします

第2話 双子の出来事（前書き）

第1話でマーレースの悲しい過去が…。

ソーラーから、マーレースせじつこへのでしょり。

そして、双子って？？

エリザベスへ

”ガバッ“

飛び起きたあたしは涙を流し、汗をびっしょり搔いていた。田の前に、心配そうに見つめるマーロンがいた。

「ふえ、マーロン…、あたし…」

最後まで言葉が出ず、マーロンにしがみついた。マーロンは静かにあたしに囁つた。

「マーレース、大丈夫マロ。こっぱに泣いていいマロよ」

ポンポンとあたしの頭を軽くたたぐ。あたしは声を上げて泣いた

少しして落ち着き、あたしが「大丈夫」と言ご、ベッドに座りなおした。マーロンの服は濡れてグシャグシャになっていた。でもきっと、あたしの顔の方がグシャグシャだわ。

「マーレース、どんな夢、見てたマロ? ちゃんと話すマロ。オイラとつても心配マロ」

じゅんとすのマーロン「あたしは淡々とあの過去について話しだめた。

話を聞き終えたマーロンは難しい顔をしていた。

「そつか、そんなことも遭つたマロね…。オイラその時は風邪で寝込んでたマロ…」

「そつなのよ、あたしその後すぐ家に帰つて部屋で泣いて…。それ以来、同世代の子達と遊びもしなかつた。ううん、近寄りもしなかつた」

あの時のことを思い出すと、今でも胸が締め付けられる。しかも未だに、同世代の子とは会おうとしない。昔のような田に遭つのが怖いのだ。あたしには友達と呼べる相手がない。あたしより少し年上の家来やメイドがいるけど、本当の『友達』と呼ぶには程遠い。あたしは、心から信頼できる友達がほしい。だけど、どうしても同

「マーレーヌ、」の機会に回じへりこのナビゲーションと話せりよつ世に襲つてくる。

「マーレーヌ、」の機会に回じへりこのナビゲーションと話せりよつ世に襲つてくる。

「マローロー！」

マーロンがあたしの手をしつかり捉えて言ひ。あたしの事を考えていってくれるんだと、心の奥からが温かくなる。

「あたしもそうなりたいと思つてゐるよ。でも、どうやつて？」

「それは、えつと、そうだマローロー！この火の王国には、マーレーヌと同じくらいの王子と姫がいたはずマロ。しかも双子の

「やうだつけ？ 知らなかつたわ」

「うんうん、これがいいマロね。王様と王妃様だけに挨拶するのもおかしいマロ。挨拶がてらに会いに行くマロ」

「へ？？ 今から行くの？」

あたしの手をグイッと引っ張るマーロン。驚いて、ためらいがちに聞いた。だつて、そんな急に話とかできないし、まず会つ事自体無理かも…。

「急がば回れつて奴マロ」

「わかつたよお～」

マーロンにグイグイ引っ張られて、双子の王子と姫の元に向かつた。通りかかったメイドによると、ダンスルームでレッスンを受けているらしい。ダンスルームだから、当然ダンスのレッスンだよね。メイドに案内されてきたのは、普通のドアの前。中から、笛や太鼓を使った民族風の音楽が聞こえる。

「こちらです。少し見学いたしましょう

「は、はい」

緊張で心臓がいつもより大きくなる。メイドがドアを開けると、ワックスの塗られたつるつるの木の床が視界に飛び込んできた。壁はドアがついている壁以外、全面鏡張りで眩しい。

入つてすぐにサングラスをかけた坊主頭の男性。

その目の前には、あたしと変わらない年頃の女の子が2人。1人

は、黒髪の飛び跳ねたミディアムショートで、ティアラをつけている。真っ赤なキャミソールに炎のマークが描かれたスカート。もう1人は、クリーム色の飛び跳ねたショートヘアで、ティアラはつけていない。襟の大きな、薄い黄色のTシャツに、真っ赤なショートパンツ。2人の共通点は、くせつ毛とつま先がくるんとしたミュールと片耳につけているピアスのみ。この2人、双子とは思えない顔をしている。黒髪の子はつり目で、クリーム色の髪の子はたれ目。筋の通つた鼻とあるいは鼻。対照的な2人だけ、息ピッタリのダンスを見ていると双子だと分かる。でも、男の子と女の子じやなかつたつけ？

そんなことを考えていると、クリーム色の髪の子がつまづいた。すると、坊主頭の男性が手をたたいて、脇にあつたプレーヤーを止めた。

「おい、フィリー大丈夫か？」

心配すると言つより、あきれた感じだった。フィリーと呼ばれた子は、

「すいません、先生」

小さな声で言つから、聞き取りにくい。黒髪の子が、

「ちょっとフィリー！これで何回目よー？パレードも近いのに、ドジつてばかり！」

腰に手を当てて、怒り口調で言つ。今のが初めてではないようだ。

「ごめんね、リリー」

フィリーはまた小さな声で言つ。消えてしまいそうな声。よっぽどリリーって子に怒られたんだろう。またリリーが何か言いそつたので、坊主頭の先生が、

「まあまあ、落ち着け。少し休憩しよう。お客様も来たようだしな」

とあたしのほうを指差す。びくつと肩が上がった。2人もこっちを見る。な、何言おう。メイドもどこか行つたし、マーロンはあたしの行動を待つてゐるし。うう…。

“スタスター”

「初めまして、リリー・ファランよ」

リリーが近寄ってきて、あたしの手をとった。こうじつ微笑んでいる。

「は、初めまして。あ、あたしマリアンヌ・ピアーノ。マーネットで呼んでね」

とりあえず、（カタコトだけど）自己紹介をした。足が震える。

お、落ち着けマーネス！

「そう、マーネスね。OKよ。あそこてるのは駄目駄目なフイリー・ファラン」

「そ、そんないい、ひどいよ～」

フイリーが鳴きそうな声で言つ。

「あちらは、ラック先生よ。あしたちにファイラの舞を教えてくださつてるの」

ラック先生がうんうんと頷く。

「ええ～っと、じつはマーロン・D・ムーケ。あたしのお供なの

「へえ～、マーロンね、よろしく～

「よろしくお願いしますマロ」

「うわあ、可愛い～」

「マ、マロー？」

いつの間にかフイリーがマーロンをつかんでいる。マーロンが可

愛いつてどうかしてるけど、まあいいか。

「えつと、あたしね、風の王国から魔歌を探す旅で来たの。少しの間、よろしくね

「そこの、すごいわね～。つてあなたつてあのマリアンヌ・ピア

「一回ー？」

「ええ？あのつて…？」

「ほら、数日前にパーティを開いて、マリア・ピアーノを超える歌姫になるつて行つたでしょ。有名よ、あなた。あのパーティ、生中継されて世界中で放送されたんですよ！」

えええ！生中継で世界中に放送！？それってアリー！？そんなあなた
しに、元

「あはは、そこまで驚かなくても。僕もバツチリ見たよ」
フィリーが言った。んん？？

「え、僕？あなたって男の子なの？」

『ブツ！アハハハハ！』

リリーとラック先生の笑い声。その2人はお腹を抱えて笑っている。フィリーは真っ赤な顔をして泣きそづだ。あたしヒマーロンはこの状況をつかめないでいる。

「ブブツ、まだなフィリー」

とラック先生。

「本当に…これで何回かしら。つまずいた回数より多いんじゃな
い！？フフ」

とリリー。

「うう～、マーネスさん僕はれつきとした、男の子だよ。グスツ
田口うつすら涙を溜めて訴える。あたしは慌てて謝った。
「う、うめんなさい。てっきり女の子かと…」

もう一度、頭からつま先まで見る。本当に男の子なの？フィリー
つて肌白いし、手足は細い。リリーは小麦色の肌だけど、フィリー
と同じく手足が細い。顔は似てないけど、女の子の双子に見えちゃ
うよ！

「3人とも初めて会つたみたいだし、今日のレッスンはここまでと
しよう。」

とラック先生は足早に部屋を出た。それを見送ったリリーが、
「これからどうする？マーネス、あなたって今日来たばかりよね？」
「う、うん。そうだよ」

「それじゃあ、あたしとフィリーが城を案内するわー！時間ががあれば、
街にも行きましょーー！」

「ええ、わかった。ありがとう」

リリーの提案にあたしは賛成した。どんどん会話が進むのは両親

に似てるから？

「オイラも行くマロー！」

マーロンはフイリーの腕からすると抜け出して、賛成した。

「ああ、マーロン。じゃ、じゃあ僕も行へよ~」

口に氣にかかる方に

「あんたは最初から行くの？」

とリリーがフイリーの左耳をグイッと引っ張った。

心地 痛い。 三郎は腰屋に見てもらひ、

「大丈夫よ、順番に案内するから。最後まで待つて

「ふあ～い」

に
！
！

行ひが、アーティストの才能を発揮する場所

イリーはすつとマーロンを放さなかつた。

食事も風呂、トイレといった普段の

一時間くらいで城の案内は終わった。今あたしかいるのは、フイリーの部屋の前。右隣はリリーの部屋。このまま、街に行くことになつたので2人は支度をしに、部屋に戻つた。リリーはすぐに出できた。特にいる物は無いと言つて、お金だけ持つてゐる。フイリーはまだ出てこないなあ。

ちよつと待つてよ。ないんだもん！」

と返事をするフィリー。すかさずフィリーが、

「ないつて何がないのよー。そんなに時間もないのよー。」

「とまた叫ぶ。リリーの言ふとおり田没まであまり時間は無い。」

「あれだよお、クマタン専用バツクウ！」

「ク、クマタン専用バツク？ 何それ…？」リリーに聞いてみた。

「あのね、あたしたちにお供がついてなくって。その代わりにフイリーは…」

「リリーー！ 手伝つてよーーー」

「もう、そのまま持つてくればいいでしょ！ さつさとしてよー！」
リリーの一言が効いたのか、フイリーはしおんぼりと“何か”を抱えて出でてきた。そうその“何か”とは、クマのぬいぐるみ。しかもへんてこりんなぬいぐるみ。これをお供代わりにもつていると言ふことね。目つきが怖いんだケド…。

「クマタンが可愛しそうでしょ。そのままなんて…」

クマタンの頭をなでる。

「じゃあ、置いてくればいいじゃないーーー！」

リリーはあきれ返つている。

「そんなんーーー」

と半泣きのフイリー。そしてリリーは、

「さつ、マレーヌ行きましょー！」

「こり顔であたして言ひ。リリーに連れられて、火の国街へと足を運んだ。

第2話 双子の出来事（後書き）

どうでしたでしょうかーー?

マークな双子ではなかつたでしょつか?

強氣で毒舌なリリー。弱氣で女の子に見られがちなフィリー。

マーナはこの2人と仲良くなれるとせでありますかね～～～～～

最後まで読んでいただきありがとうございました♪

感想や指摘、どうぞお願いします♪

次回は双子とお買い物にーー!

第3話 双子と共に（前書き）

少し、更新が遅れてしましました…

わあ、双子と共に買い物に行きます！

ドキドキするマーネを引っ張る双子の姉・リリー。

マーロンを気に入った女の子みたいな双子の弟・フィリー。

買い物と前夜祭の話になつてます！

じゅわじゅわくつ

第3話 双子と共に

街は先ほどと同じく活氣付いていた。人がたくさん行き交つ。風の王国だってたくさん人が行き交つているが、あたしは過去のことがあつて外出を控えていた。でも、こんなに素敵な街並み。存分樂しまなくちゃ！

「マーレーヌ、どこに行きたい所ある？？」

リリーが歩きながら聞いてきた。

「そうだなあ……」

実の所、行きたいとこはなかった。それに、同年代の子と話すなんて久しぶりのことで、かなり口下手になってしまった。言葉がなかなか出てこない。

「2人の行きつけのお店を紹介してもらうのはどう？？」

マーロンがフォローを入れた。ありがとマーロン……心中で感謝する。

「いいわね！じゃあまずあたしの行きつけのお店にレッツゴー！」
張り切るリリーはあたしの手を引く。びっくりしたけど、振り払うなんてことはできず、かえつて嬉しく思った。友達と買い物に行くとこんな感じのかなつてわくわくしていた。

「いいよー。」

リリーに連れられたのはかわいい雑貨店。ちょっと派手な感じの小物が並ぶ。

「やつぱりリリーはここだね」

フィリーがのんびり言った。

「決まつてるでしょー！？まつ、あんたの行きつけの店なんて承知しますケドー！」

リリーが強気で言った。

「マーレーヌ、来て来て。いいものがあるのよー男子諸君は勝手に見

てて

「へー? ちよっと、リリー!」

またリリーに連れられ、店内へ入つていった。赤や青、オレンジ、緑、よく見るとエスニックでヒッピーな感じのものばかりだった。おしゃれな女の子たちがじつくり小物を眺めている。出来るだけ、昔のことを考えず、リリーについて行く。

「どう? 」の髪飾り! …素敵でしょ?」

リリーが立ち止まり、並べられていた髪飾りの一つを頭にかざす。

赤くて丸いストーンを囲むようにして白い羽がついた髪飾り。

「かわいい! リリー! ピッタリだと思つよ。ストーンの鮮やかさがすこく似合つてる! ! !」

あたしの言葉にリリーははにかみながら微笑んだ。

「ほんと? やあね、フィリーと一緒にきて感想聞くのよね。でも、うんいいと思つよ~なんて。適当で~…やつぱり女の子と一緒に買いい物するのは楽しいわね!」

「や、そう! あたしこんなの初めてで…。あたしも樂しい! ! !」

リリーは頷きながら、他のものを物色している。

「マーレースは買い物とかしないの? 友達と一緒にひこひこお店とか

…

「つづん…あまつねひこひこ? としないの! あたしあんまり外出しないから! ! !」

リリーの言葉を遮つて、明るく言った。本当のことがばれたくなくて、明るく言った。リリーは少し驚いたようだがかわいいシユシユを見つけてあたしに見せた。

「ちよっと、マーレース! これ、あなたに似合つわ!」

白にサテン生地に銀色のラインが入つたかわいらしくシユシユ。シンプルだけど、何にでも合つそうなシユシユだった。

「どうかしら? 風の王国つて銀色つてイメージがあるから…。マーレース、つけてみて! ! !」

リリーは2つシユシユを取り、あたしに差し出した。2つという

」とは髪につけたらしいのかな？ちよつと緊張しながら、高く縛つたツインテールに付けてみる。

「…つ、つけたよ」

顔を上げて、おずおずと微笑む。リリーは顔を輝かせて、「うん！あたしの思つたとおり！いいじゃない！！！」

「ほんと？ありがとう…。うれしいな」

鏡を見て確認してみる。銀色のラインがキラキラ光つてい。サテン生地も輝いてる。

「そのシユシユどう？あなたことつても似合つと思つんだけビリリーが様子を見て咳く。

「もちろん、買うーせつかくリリーが選んでくれたんだもん」髪から取つて、もう一度シユシユを見る。なんだか、うれしくなつた。初めて会つたリリーに似合つと選んでもらつたシユシユ。ずっと大切にしようとそつと決めた。

「んじや、あたし他に欲しい物無いから会計しちゃう？」

「やうするーあたし早くシユシユ買いたい！」

せわつと会計を済ませて店内を出た。しかし、マーロンとフィリーの姿が見当たらない。

「あれ？もしかしてもう行つたのかしら…」

リリーがため息をついて言った。

「どうする？何処に行つたかもわかんないし」

「大丈夫！フィリーのことなら、なーんでも分かつてゐるから。わつ、行こつか」

リリーがずんずん歩いていった。

「待つてー」

置いてかれないように慌てて追いかけた。と、あたしの足元に一枚のチラシが落ちていた。拾つて見てみる。

「不死鳥パレード、ファイアー・1・コンテスト？」

パレードのコンテストの呼びかけのチラシのようだ。手に抱えたまま、リリーを追いかけ聞いてみた。

「ああ、それはね、なんでもいいから自分が得意とすることをやつて、1番優れている人を決めるの！優勝した人は素晴らしい名声をいただけてね、火の王国ではすごく名誉なことなの…」

リリーは生き生きと答えてくれた。

「それに出る為、あたしとフィリーはダンスのレッスンをしてたのよ。コンテストに出る為にずっと練習してきて、今年、やっと初出場！ファイラの舞は火の王国の伝統的な踊りで王家の者は必ず踊れなくちゃならない。だからその踊りで優勝できたらすごいと思わない？」

リリーは今までを懐かしむように話してくれた。その横顔はとても真剣なもので、凛としていた。右耳についているイヤリングが赤い光を放っている。ぼおっと見つめていると、

「やあね、恥ずかしいじゃない。そんなに見つめないでよ

「はっ…」、「めん。なんだかすごく綺麗で…。イ、イヤリングが！」

勘違いされそうだったから、急いで言い直した。（いや、リリーは綺麗だけど…）

「このイヤリングはアミコレット。火の王家のアミコレットよ。あなたもらってたでしょ？」

とあたしの首元を指差した。あたしはチョーカーに触れて、聞いてみる。

「これ？」

「そう。王家の者なら王家として認められたときに、証の宝石がついたアミコレットをもらえる。マレーヌの場合、風の王家である証のクリスタルがついたチョーカーね」

リリーの返答に驚いた。このチョーカーがアミコレットだったなんて。ただのアクセサリーかと…。

「そうだったんだ。お守りの効果ってどんなのかな？」

「さあ？あたしのアミコレットの効果でさえ分からないから…」

トイヤリングに触れながら答えるリリー。

「リリーのアミコレットについての宝石は？」

赤く光る宝石を見つめ、素朴な疑問をふつかけた。

「これはルビーよ。紅玉とも言われる宝石」

「へえ。赤いから火っぽいね」

「ふふ、そうね。このイヤリングは10歳で1つ、20歳で両方が揃うの。んで、あたしたちは…あたしが右耳でフイリーが左耳につけつて別にどうでもいいわね」

リリーは笑つて誤魔化した。なんだかんだ言つて、フイリーのことが大好きなんだな。くすつと笑つてしまつた。

「ちょ、ちょつと何笑つてんのよ…」

慌てるリリーにあたしは、

「なんでもないよ」

納得いかない様子だつたリリーだが何かを見つけて走り出した。

「ああ！まつてよ～」

追いついた矢先。

”スコーン”

「いつたいーいーー！」

「もう！待つてろつて言つたでしょ！？なあに勝手に先行つてんのよー！」

目の前に頭を抑えるフイリーと拳でチヨップを入れるリリーの姿。そのすぐ傍でマーロンが呆然とその光景を見ていた。

「ごめんね、リリー。だつて、早く行きたかったんだもん」

「だからつて何か言つてから行くでしょ！？」

とこんな感じで口論が続く。とりあえずスルーして、マーロンに

声を掛けた。

「マーロンー！」

「あつ！マレーーヌー、助かつたマロー。次の店に行くとか言い出しだつたのー？」いいタイミングだつたみたいね

「うんうん。マレーーヌはどうだつたマロ？」

「そうだつたのー？」いいタイミングだつたみたいね

「うんうん。マレーーヌはどうだつたマロ？」

「 とても楽しかつたわ。シユシユ、買ったの！しかもリリーが選んでくれたシユシユ！！」

会話の途中、マーロンがフイリーに助けを求める？悲痛の叫びをあげた。

「うえ〜ん、マーローン。僕何にも悪いことしてないのにい「わっかかるるマツロー！いいから離してマロー！ーーーーー！」わかつてゐるを嘗つだけなのに、『ひ』がやけに多かつた。

「イヤだよ！……恥ずかしいもん」
イヤだよはハツヰリ言つた割に、後の言葉は自信なしといった感

じだつた。

「まあいいわーー帰つてゆうべじゅうべり話を聞かせてもいいからーー

「そ、そんなん～」

「わざと帰るわよ、フィリー。わ、帰りましょ。マーテヌ、マーテヌ、

あからさまに違う態度。フィリーには無事を祈ることしか出来ない

かつた。

「ふう、やうやくタクタクタナリ

ローバルローバルを下したあたり。そして、シビアな顔つきで

「あのフィリーワ子はオイフにベタベタしそうマヨニ。大変な事にな
ンが部屋に入ってきた。

遭ったマロ「

マーロンは疲れた表情でベッドに身を投げた。あたしは苦笑いで、「ふふ、まあいいじゃなー!」。フイリー「こ仔かれてー

「マローラー」

街に行つてゐる間、フイリーはマーロンをクマタンと一緒に放さなかつた。そしてフイリーはクマタンのバツクを買つたらしい。し

かもめちゃめちゃフリフリな。（by マーロン情報）

街はとてもにぎやかで、活気付いていた。リリーによると、パレードが近いので人々が準備に取り掛かり、にぎやかになっているとのこと。パレードは年に1度あり、火の王国誕生を祝うものと言っていた。パレードは火の王国の人以外に他国の人も訪れるほど、盛大に行われるそうだ。風の王国にもそうゆうパレードがあればいいのにな…。

「ところでマーレース、パレードはいつ開催されるマロ？」

「ええ」と、3日後

「そうマロか？」

「あ、そういうえばリリーとフイリーはパレードのコンテストに出場するみたい」

「すごいマロよね。あの2人はダンスで出場するって言つてたマロね」

リリーとフイリーが踊つている姿を思い出す。一生懸命頑張つてたな。

「そうだマロ！マーレースも出場すればいいマロ～！」

『出場』という言葉にあたしは驚いた。

「なんで！？あたしが出場しなきやならないの！？」

「こんな機会めつたにないマロ。大勢の人々にマーレースの魔歌を聞かせるマロ！！」

「あたしの魔歌を人々に…？」

「そうマロ。マーレースの魔歌を聽けば、みんな感動するマロ～。

しかも当田までに希望しておけば出場できるつて、チラシに書いてあつたマロ

「でも、大勢の人の前で歌える自信ないもの…」

家来やメイドとか、魔歌の先生や両親とか、身近な人の前だつたら自信を持つて歌える。けど、大勢を前にして歌う自信なんかない。だけど、もう1人のあたしは歌え歌えつてわめいてる。そんなあたしにマーロンの言葉が後押ししてくれた。

「自身なんか必要ないマロ。ただ、みんなが笑顔になつてほしい、みんなに元気になつてもらいたいって言つ氣持ちでマレーヌは今まで歌つてたマロ。それを發揮するときマロよ。違うマロ?」

「つうん、違わない。そうよな、魔歌はみんなの為を想つて歌うものよね」

「うんマロ。マレーヌ、コンテスト出場するマロ?」

「ええ、もちろん!」

それからすぐ、コンテストに出場する為に申し込みをした。今は出場するひとが少ないからって、喜んで出場が決まった。毎回約300組出場するのに、今回は180組しか出場しないらしい。頑張つて優勝しなくちゃ!…といつても練習する口はほんのわずか。今日はもう遅いし、明日と明後日、明々後日の午前中しかできない。しかも、明後日は前夜祭で夜7時からお城で儀式があるみたい。火の王誕生説に出てくる『不死鳥』の為に儀式をして、豪華な食事をしてと、みんなが騒ぐやうだ。ちょっと、心配だけがやるつまらない!~

（前夜祭）

”わわざわざわわざわ”

「騒がしいでしょ。…前夜祭って」

隣でリリーの声がした。周りがうるさくて、かるうじて聞こえた。「まあ、みんな楽しそうだからこんじやない?」

と返した。本当にみんな楽しそう。

「本当は、儀式が終わってからの食事が楽しみなのよね、きっと」とリリーが言った。あたしは今、普通にリリーと話しているけど、それはリリーと（フイリー）が優しくしてくれるからだ。あたしは同じくらいの年の子が苦手だった。少し、ほんの少しだけど、自信が付いてきた。リリーが同じ王家人だからってのもあるかもしれないけど、すごく楽しい。お城の案内をしてくれたときも、街に行つ

たときも、今も、楽しいときを過ごせている。リリーはサバサバしているので話しやすい。時々、（フィリーに向かつて）毒舌を吐くこともあるけど、それもリリーとしてのいい一部なんだと思う。

「みなさま、静粛に。前夜祭を始めます、」

白ヒゲのおじいさんがマイクに向かつて声を上げた。すると、騒いでいた人々が静かになった。ステージの上で白ヒゲの紙を見ながら進行している。あたしは、王家の人に関連する席に座っている。ステージの真正面に長机が置かれ、そこで座り心地いい真っ赤な椅子に座っている。あたしの後ろにずっとテーブルが何台も置かれて、その周りに5、6人グラス片手に立っている。

ステージの上にリリーとフィリーのお父さんつまり、王様が立ち、挨拶が始まった。

「ええ、本日は待ちに待つたパレードの前夜祭だな。年に一度ということで他国からも大勢、パレードに参加しようと訪れておられます。誠に感謝申し上げます。今年もまた火の王国として、熱いパレードにしようではないか。

しかも、今年は100年に一度の『大幸福の年』。ちょうど100年前の『大幸福の年』に、マリア・ピアーノが不死鳥と我々火の王国の民の為、魔歌を納めたのだ。そして、その魔歌は100年後の『大幸福の年』の不死鳥パレードで不死鳥と共に今一度目覚める、と書物に記されていた。どのような魔歌は誰も知らぬ。不死鳥の再生と共に魔歌が聞けるのだ。我々は とても素晴らしいときを過ごしているのだと、感じられるだろう。

『フォーリー』

”パチパチ パチパチ”

盛大な拍手と歓声が会場に広がった。

「マーネ、今の聞いたマロか？不死鳥と共に魔歌が現れるってことマロね！」

「そうみたいね。なんか、とんでもない時にあたし達はいるのよね！」

王様の話を聞いて、長机座っていたマーロンが興奮して言った。
100年に一度の時に、再生する不死鳥と一緒に魔歌が現れる。ホント、とんでもない。だって今年、この日（パレードの日）にないと、火の王国の魔歌を手に入れることはできなかつたのよ！？なんかすごい偶然。旅をするのが遅かつたり、火の王国を後回しにしたりしてたら、駄目だつたつてコト。

前夜祭は順調に進み、とりあえず終わつた。儀式は退屈だつたけど、食事は楽しかつたし、豪華でとても美味しかつた。リリーとフレリーに「おやすみ」と挨拶をして、部屋に戻つてきた。

「うう、マーロン、あたしあの腹がはち切れそうだわ」
「オイラもマロ。もつと、控えるべきだつたマロ」
チラツとマーロンのお腹を見ると、

「ぎゃー！何そのお腹！お相撲さんみたいよー？」

短い悲鳴を上げてしまつた。だって、マーロンのお腹が服からほみだしてゐるんだもん。しかも、真ん中の出ベソが目立つてゐる。『お相撲さんなんて、言ひ過ぎマロ～』

「そんなこと言われても、お相撲さんとしか言ひようが無いのよ（笑）」

「ううー、言ひ返せないマロ」

「まあ、明日はコンテストもあるし、さつさと寝ましょ

あたしはマーロンをユニットバスに入れて、ルームウェアに着替えた。マーロンをユニットバスから出して、（ベッドが1つしかないの）、一緒に寝た。起きた時、マーロンがあたしの下敷きになつていたのは、言つまでもない…。

第3話 双子と共に（後編）

“…でしたでしょうか…？”

なんと、マーティヌもコンテストに出場するとなつましたねえ！

魔歌が不死鳥と共に…復活…？

最後まで読んどくだけつあつがと「…」これましたペ

次回もお楽しみに～ペコペコ

第4話 ケンカにケンカ（前書き）

不死鳥パレード當田ですーー！

何が起じぬか分からぬ、ドキドキの幕開けです。

感想お待ちしておりますーー

じりんじゅつくつ

第4話 ケンカにケンカ

「不死鳥パレード 当日へ

「Ah~、Ah~」

ボイトレ（ボイストレーニング）ルームで今、あたしは魔歌の練習に取り掛かった。まずは、発声練習をやっているけど…。起きたのが8時で焦りまくつた。ただでさえ、時間が無いから7時に起きようと思つてたのに…。急いで朝食を済ませ、タンクトップとミニスカートというラフな格好で練習を始めた。

コンテストは4時から中央ステージである。中央ステージは中央広場にあるから、そのまま中央ステージと名づけられている。中央広場は普段、人々の憩いの場や市場としても使われているらしい。そんなところで、パレードが行われるのだから、すごい騒ぎになるだろう。また、中央ステージでは、コンテストの前にも色々なことをするらしい。だから、2時には練習を切り上げて、屋台を見て回つたり中央ステージで行われることを見ておこうと思つ。こんな体験初めてだから、めいいっぱい楽しまなくちゃね！

「よしつ。発声練習はこんなもんでいいか

「マーネ、オイラも一緒に出てもいいマロか？」
マーロンが突然切り出してきた。

「へ？マーロンも一緒に歌うの？ハハハ、無理でしょ～」

あたしはマーロンが歌つている姿を想像して言った。しかし、マーロンがモジモジしててるから、あたしはもう一度（今度は真剣に）聞き返した。

「マーロン、あなたにはちょっと無理じゃない？一緒に歌うのは…。それに全く練習してないのに…」

「ち、違うマロ。オイラが歌うなんてとんでもない

マーロンが慌てて言つた。そして、続けた。

「オイラは魔歌に合わせて演奏するマロ」

「え？ 演奏つて、何使うの？」

すると、マーロンが愛用のココックから小さなギターを取り出した。

「これマローーーのギターは妖精界のギターなんだマローー。^{フェアリーワールド}なぜか、自慢げに言つてるんだけど…。ズバッといつナビ、あまり自慢する所ではない。」

「オイラ、暇さえあればいつも弾いてたマロ。オイラ、妖精界でも結構有名なんだマロ。上手にって評判マローー！ それに、マーレーヌの魔歌はいつも聞いているから、上手くできる自身あるマローーー！」

「また自慢口調。でも、そんなに言つから、上手なのかな？」

「ちやんと、魔歌に合わせて弾けるのね？ へましないのよね？ 練習だつて、全然してないのよ？ あたしも、マーロンも…」

マーロンに確認する。当の本人は余裕にギターを弾いていた。

“ジヤワラン”

「任せのマローーー、わざと練習始めるマローー」

「もー、マーロン、ちやんと聞いて。あたしにとつてはこんなこと初めてなんだよーー？」マーロンは妖精界でやつたことあるのかもしれないけど、あたしは…」

「じめんマローー。そりマロよね、マーレーヌは人前で、しかも誰が見てるのかわからぬ中で、歌うマロね」

あたしが強く言ひ過ぎたせいで、マーロンがしょぼんとした。しかし弱々しいけど、でもはつきりした口調で語り始めた。

「オイラは、マーレーヌの力になりたいマロー！ オイラは何もできないお供じゃないマロ。マーレーヌの中ではただのお供つて言つ感覺だつたかもしれないけど、オイラはマーレーヌの特別なお供になりたいマロ。家族や兄弟みたいに支えてあげられるお供になりたいマロ」

マーロンはそんな風に思つていたんだ。あたしは、マーロンをただのお供つて目線で見ていたのかもしれない。彼の言葉で今、そう気付かされた。マーロンは涙が出そうになるのを堪えながら、

「オイラ、いつかマーレーヌの魔歌にオイラのギターを合わせるため

に頑張ってきたマロ。オイラは決して軽い気持ちでコンテストに出

よつと言つたんぢやないマロ

「マーロン、ありがと。それからあたし…『めんなさこ』。マーロンはずつとあたしのそばで支えていてくれたもんね。」

マーロンの頬を一筋の涙が落ちる。あたしもいつの間にか涙を流していた。

「あれ？涙が…、えへへ。マーロン、一緒にコンテスト出よつーでもつて、優勝しよーあたしとマーロンの素敵なハーモニーで泣かせちやいましょー…！」

そして、2人合わせて笑った。

「こらつしゃーこ」「いれぐだわこ」「やや、いほじぢやつた」色々な声が聞こえる。四方から聞こえる声は、どれも喜びや楽しきの声だった。

あたしたちは練習をきつあげて会場に来た。あたしとマーロンは

かなり息ピッタリで意外にも早く練習を終えることが出来た。

「マーロン、このパレードすごく楽しいパレードみたいね

「みんな楽しそうマロ。マーレース、オイラも何か食べたいマロ

とマーロンが辺りをキョロキョロ見渡している。

「はこはこ。じゃあ、あの『火の王国名物・ペリ辛ポテト』食べよつかなー」

「オイラが買つて来るマロー！」

とちやつかりあたしの財布を持つて『ペリ辛ポテト』を買ひに行

つた。

(もう、マーロンったら。とつあえず、座るとじぶん見つけに行つて)

(と)

探してみると、誰も居ない席があった。行こうとしたその時、

「お嬢さん、かわいいですね」

え？かわいい？まさかナンパ！？ぐるっと後ろを振り返ると、黒いローブを着た女性が立っていた。

「パレード限定であなたみたいな可愛い娘にコレ、配つてるの」持つていたかごから取り出したのは、

「香水ですか？」

小さなビンにはいつた黒い液。黒といつても、透明な黒ね。

「はい。炎を燃やした後に出てくる灰の成分と特殊なハーブを混ぜ込んだ、香水です。無料で配布しております。さあ、どうぞ」

「ありがとうございます」

あたしの両手の上にチョコソムのつた香水。中の液体が太陽の光を受けて、キラッと反射する。顔を上げると、女性はもう居なくなつていた。はやー！背伸びして、見てみるけど、人が多すぎて分からなかつた。

まあ、いいか。あつと、席とうなくちやー！急いでさつと見つけた、席に向かつて走り出す。

“じんつ”
「きやつ！」

誰かにぶつかつてしまつた。

「すいません、だいじょうぶですか？」

ぶつかり声をかけられたのは、（これまた）白いローブを着た女性。こんな日にローブって暑いでしょーー！

「いえ大丈夫です。こちらこそ、すいません…。あ、香水が…」

返事をしたときに、自分の横に割れたビンが転がつているのに気付いた。ビンは無残にもバラバラになり、液体がその周りに広がつている。鼻にかかるのは独特の強めの香り。ハーブにしてはきつい香り。頭がボオッとしてくる。

「ごめんなさい。」

小さな声で謝る女性。その声に我に返つた。女性は慌てて、ビンのかけらを拾おうとする。

「ああ、大丈夫ですよ。危ないし…」

あたしが落ち着いて言った。しかし、女性は細く白い指で丁寧にビンのかけらを拾い集めた。そして、こぼれた液体の上で手をふると、液体はすっかりなくなってしまった。周りに広がっていたかおりもすーっと消えていった。

今のは、魔術だろう。そこまでしなくてもいいと思つたが…。

「本当にじめんなさい。お詫びといつたらあれなんですね…」

すつと魔術をかけた方の手を差し出して、あたしの左手の中に何かを入れる。そのまま、すくすく立ち上がり一礼して、走り去つていった。あらら、行っちゃった。あたしのまつも、悪かったのになあ。あたしも立ち上がり、ほこりをはらい、左手を広げる。左手に収まっていたのは、真っ白いハーブだった。

「マーレース、遅くなつたマロ～。ん、どうしたマロ～？」

とマーロンがピリ辛ポテトを持つて走つていや、飛んできた。

「ええと、なんでもない。遅かつたわね」

平静を装い、ポケットにハーブを入れた。

「だつて、すごい人気だつたマロ～」

「名物だつたみたいだしね。とりあえず食べましょ」

幸いなことに、席は空いたままだつた。

「う～ん、いい香りマロ～」

とマーロンは一本手にとつてしげしげと見る。あたしは手に取り、ヒヨイシと口に放り込む。その名のとおりピリッとした辛味があつた。この味は癖になりそうだわ～。マーロンも気に入つてどんどん食べてこる。

「あら、そんなに食意地を張つてゐるマーレース姫に、お供のマーロンかしら？」

後ろでからかうような声がした。声の主は…

「リリー！ フィリーもー！ どうしてここに？」

黒いマントに身を包んでいるリリーとフィリー。不思議に思ったけど、フィリーに先を越された。

「街を一周してきたから、休憩しに来たんだ」

小声でぼそぼそと行った。

「大変だったわよ、ホント。つたくう、開会式だけ出ればいいかと思つたのに…」

トリリーはブツブツ独り言を言い始めた。リリーとフィリーは開会式のときに、火の王国の代表者と一緒に“ファイラの舞”を踊つていた（開会式を実際に見たわけではなく、ボイトレルームのテレビ中継で見た）。2人とも真ん中の方で生き生きと踊つていて、凄くカッコ良かった。しかし、なぜカリリーの機嫌が悪いみたいだ。

「リリー、どうしちやつたの？」

フィリーにこそと耳打ちした。

「うう、実はね、舞をするのは開会式のときだけって言われてたんだ。だけど、主催者の人が街一周、代表者と一緒に踊つて来いつて言われて…。練習するつもりでいたのについて、リリー機嫌悪くしちやつたんだ」

と説明してくれた。

「フィリー王子が怒らしたんじゃないマロね」

マーロンがボソッと呟いた。もう、マーロンめ！ フィリーが涙目にいい。

「マーロン、ひどいよお～。僕のせいじゃないのに…」

そんなフィリーにリリーが、

「フィリーめそめそしないの！ ああ～、もうイライラするーあんたはすぐにそうやって泣き出すんだから」

鋭く言い放つた。これ、ヤバイ雰囲気かも…。

「そんな、泣いてないよ。リリー… そんなに怒らないでよー…」

フィリーが意外にも強く言った。

「いつつも怒つてばっかりで、もつと優しくしたつていいじゃないか！」

今まで溜まっていた気持ちを吐き出すよつと書つた。

「何なの…？ 怒らしてるのは誰よ…？ いつもあんたじやない…」
リリーも負けていない。言い争いが激しくなりそう。止めなくち

ややばい！！

「ちょっと、2人ともやめて！」

「もういいわ。あたし、あんたなんかコンテスト出ないから！」

「……いい、いいよ！……ぼ、僕だってリリーとなんか……出ないもん！」

あたしの止めも空しく、2人はそんなことを言い合つ。リリーは本気で言つたらしい。でもフィリーは流れのまで言つたらしく、言つた後にオロオロしている。

「ね、ねえリリー、フィリー、もうちょっと考へない？今まで2人で頑張つてきたんでしょ？」

「そうマロ。こんな簡単に諦めるなんて、絶対駄目マロ……」

あたしとマーロンが説得しようと試みた。しかし、

「フィリー、あんたには失望したわ」

リリーがそう呟いた。フィリーはハッと顔を上げた。今にも涙が零れそう。

「……じゃあね」

リリーの別れの言葉。そう言い残して、リリーは走り去つて行つた。

「リリー！待つてー！」

叫ぶ弱弱しい声は届かなくて……涙が地面に滲む。

第4話 ケンカにケンカ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。おまけページ

第5話 仲直りの準備

双子の片割れの声がリリーには届かなかつた。フィリーは涙を流して、肩を震わせている。マーロンは自分の一言で事態を招いたのだとオロオロしている。

「どうしよう…」。リリーはコンテストに出ないつて言つてた。あれが冗談で言つたとは、絶対に思えない。コンテストまであと少しなのに。2人ともあんなに頑張つて練習してたのに。こんな仕打ちない！ 一人を仲直りさせないと…。でも、どうやって？ コンテストまで時間もあまりない。それまでにリリーを見つけて、フィリーと仲直りさせるのは難しい。

「どうすればいい？ あ、そうだ！ あたしにだつて、できることがあるわ。一か八かも知れないけど、こうするしか方法はない。」「フィリー、絶対にコンテストに出るのよ！」

フィリーの肩をつかんで強く言つた。フィリーは体をビクンとさせた。

「グス、もう無理だよ。リリーがいないと、ファイラの舞は踊れない…」

「大丈夫、ちゃんと仲直りすれば、リリーはきっと…」

「そ、そうマロヨー！ リリー姉だつて許してくれるマロ」

「で、でも、もうコンテストまで時間ないし、リリーは許してくれないよ…」

声が震えている。諦めているみたいだ。

「とにかく、コンテストには絶対出るのよ。あんなに頑張つてたじやない！」

「でも、僕…リリーの考えてることが分からなによ」

涙目で訴える。

「そんなことない。あなたはリリーのことを一番分かってる。それには、リリーもあなたのことと一緒に分かってるはず。そうでしょう？」

「……」
フイリーは優しく問い合わせた。フイリーはあたしの顔をじっと見つめて、

「ほんとだよね？じゅあ、リリーは…コンテストに出でくれるよな！？」

「……」
フイリーは顔を上げて聞いてくる。あたしはそれにまことに答えた。

「ええ、絶対。あなたたちはラストだったわね？？」

「う、うん。そうだけど…」

「じゃあ大丈夫。あたしが何とかする。コンテスト頑張りましょ！マーロン、付いてきて…！」

「わ、分かったマロ」

マーロンの返事を聞くなり、あたしは走り出した。

人通りの少ない所に来た。

「マーレース、どうするマロ？リリーはどうが行くちやつたマロよ」立ち止まつてマーロンが言った。

「あたしは最強魔術師マリア・ピアーノの子孫よ！魔歌だけがとりえじやないのよ…」

腰に手を当てて、鼻を鳴らす。マーロンはぽかんと口を開けている。やつとの事で口を開いた（既に開けてるから、声を出したかな）。

「魔歌だけがとりえじやないと言われてても…。どうするマロ？」「……」

「あのね～、”魔術”があるでしょ！」

「ほつほつマロ。それでマーレースは魔術使えるマロか？」

頷いたのはいいけど、その後の言葉にムッとした。

「使えるに決まってるでしょ！毎日毎日練習してたの」

「へえ～、じゅあどんな魔術を使うマロ？」

「やつと本題にたどりついた。時間がないのよ、もう…！」

「ビデオレターの魔術よ！名前はあたしが考えたの」

「ながら、素晴らしいネーミングセンスよね

「」の魔術はその名のとおり、ビデオレターみたいに映像を遠くの人に見てもらえるの！しかも、録った物を見るじゃなくて、生放送

みたいにその時やってることを見れる高度な魔術なのよ！」

「すごいマロービデオレターというよりテレビの生放送マローワーで、どうやって2人を仲直りさせるマロ？」

マーロンの軽いツッコミでキッとしたけど、それを言ひれないよつて言った。

「ふふーん、とにかく鏡を2つ用意してくれる？」

「え～っと、ちょっと待つマロ」

とリュックの中を探し始めた。そして、2つ小さな手鏡を取り出した。

「OK、ちょうどいいわね。じゃあ、会場に戻るわよー！」

「ええ、それだけマロ？仲直りはど～なるマロ？しかも、いへんに必要あつたマロ？」

また、軽いツッコミを無視し、マーロンにワインクをして宣言。

「まあ、見てなさいって！それと、魔歌変更よ！」

マーロンから手鏡を奪い取り、ドレスの右上のポケットに突っ込んだ。会場に直行！

「ああ、マーレースをあん！」

フイリーがパタパタと歩み寄つてきた。

「待たせちゃつたね、ごめん」

軽く謝つて、受付に近寄つていぐ、

「すみません、110番のマリアンヌ・ピアーロですけど…」

「はい、110番ですね。お2人のエンターテイナーでしたね。どうぞ、バツジです。必ずつけて、出場してくださいね。時間まで、会場周辺でお待ちください」

受付の人からバッジを貰い、マーロンとフィリーの所に戻った。マーロンにバッジを渡して、自分につける。

「マーレーヌさん…、どうなつたんですか？」

「え~っと、とりあえずあたしの番まで待つて

「ええ、リリーはいないんですか？」

困惑状態のフィリー。マーロンが、

「大丈夫マロ。マーレーヌに作戦があるらしいマロ。オイラも知らなければ…」

しほつた声で言った。あたしは自身ありげに、

「心配しないで、リリーはきっと来るはず。あたしを信じて、ね？」

微笑んでみせた。

「う、うん」

半信半疑な返事だつたけど、フィリーは信じてくれた。

「さあーー、始まりましたー、不死鳥パレード最大のイベント、フアイアー・ワン・コンテスト！」

『わあーーーー』

大歓声に包まれて、コンテストの幕が開いた。コンテスト前はバラバラだった人たちが、会場に集合して一体となつている。

「すごい盛り上がりね」

隣で見ているマーロンに話しかけた。

「そうマロね。マーレーヌ、本当にできるマロ？」

不安げな答えが返つてきた。

「大丈夫よ、魔歌変更はあたしが決めたんだから

そう、魔歌変更をして練習したのはわずか數十分。どんなメロディーか鼻歌で教えて、1度合わしだけだつた。

「違うマロ。フィリー王子達の事マロ。本当にできるマロか？」

マーロンがフィリーを見ながら言った。フィリーはステージから離れた椅子に座つてボーつとしている。あたしは本音を言った。

「絶対にできるって訳じゃないわ。そこで、魔歌が大切になるの。

でもね、正直言つて、魔歌が上手くいくか分からぬ。今回の魔歌は初めて歌うから自信ないのよね~」

マーロンが反論しそうだったので、すかさず、

「大丈夫だつてば。言つたでしょ、あたしはマリアの子孫なの。魔歌は得意中の得意よ。今までたっくさん練習してきたわけだし！」と笑顔で言つた。マーロンはあきれたのか、感心したのか分からないけど、黙つてしまつた。あたしは出番までゆっくり観覧する事にした。

コンテストは老若男女、初出場や常連出場者など、色々な人がいた。ジャンルも様々で、歌にダンスにお笑いに得意芸にと、みんな思い思いに披露していた。集まつた人々は心から楽しんでいるようだつた。マーロンもすっかり楽しんでいるよつでほつとした。でも、フイリーは周りを見渡して、ため息をつくの繰り返しだつた。早くあたしの出番にならないかな…。早くしないと、フイリーまで出たくないつて言い出すかも…。

「マレーヌ、もうそろそろ控え室に行くマロ」

マーロンに声をかけられたので、足を運ばせた。控え室前で足を止めた。

「おつと、忘れてた。マーロン裏回るわよ！急いで」

ササッと裏に回つた。回つたのは、魔術を使う為だ。ポケットから2枚の手鏡を取り出した。マーロンに手鏡を2枚とも渡して、魔術ノートを左下のポケットから取り出し、ぱらぱらめくつた。魔術ノートには今まで習つた魔術や効果、準備物、呪文をびっしり書いている。

「いくわよ…。 真実を撮る鏡となれ！」

片方の鏡を指さした。すると、鏡に向かつて黄色の光が飛び出した。

「ひつちはつと…。 真実を映し出す鏡となれ！」

もう片方の鏡にも同じことが起つた。でも、光はオレンジ色だつた。

「黄色のまつ貸して

「マークンから黄色の光を受けた鏡を貰つて、あたしの顔を映して見せた。すると…。

「わあ、マーネスの顔が映つたマロ～！」

マークンから驚きの声が漏れた。あたしは少し微笑んだ。最後にもう一つ魔術をかけなくちゃ。

「んじや、マークンが持つてる鏡をリリーに届けるわよ」

深呼吸して、魔術ノートを見なくてもできる魔術を唱えた。

「 風よ、品を使へと届けよ～！」

フワツと風が吹いたかと思うと、マークンが持つている鏡が浮き、

西の方向へと飛んでいった。これでリリーの元に届くわね。

「さつ、控え室で待つわよ～」

「ええ？ 分かったマロ…」

控え室で20分ほど待つていると、出番になり、呼び出された。「マークン、ギターは出来る所だけでいいから」とそつと声をかけた。

「大丈夫マロ。マーネスにしつかり合わせて、優勝狙うマロ～！」

マークンが拳をグツと握った。やる気満々みたい。あたしも負けられない～！

優勝目指して！双子の仲直りの為！あたしは魔歌を歌つてみんなに笑顔、元気、感動を届けるの～～

第5話 仲直りの準備（後書き）

いかがでしたでしょうか？

感想などいただけたら光栄です！！

夏休みも後2日と迫りましたね。

私は今日、宿題が終わりました。。。ぎつぎつセーフです。
みなさんは楽しい夏休みが過ごせたでしょうか？？

新学期に入ると、更新率が落ちるかもしれませんが頑張っていきます！

最後まで読んでいただきありがとうございましたペコ

第6話 大切な人へ（前書き）

更新遅れてしまいました！！

リリーとフイリーの仲直りのためにマーレー・ヌが歌います！

どうぞじゅつくり お読み（お聞き）ください

第6話 大切な人へ

「110番、マリアンヌ・ピアニコさん、マーク・D・ムーケさん、どうぞ！」

司会者があたしたちの名前を呼んだ。2人で顔を見合わせ頷いた。ステージの真ん中に立つ。あたしはスタンドマイクの前に立ち、その隣の小さな椅子にマークが座る。

「みなさん、元気ですか～？」

マイクに向かつて声を出す。大勢の人がイエーイと答えてくれた。「あたしは今、魔歌の練習をしています。ぜひ、皆さんに聞いて頂けたらと思い、出場しました」

一呼吸置いて、

「今回歌う魔歌は、家族や恋人など、大切な人に届ける魔歌です。大切な人の顔を思い浮かべながら、聴いてください」

一礼して、マークとアイコンタクト。スッと二人の呼吸が合つ。

大切なキミを傷つけてしまった ほんの些細なことだったのに

A-h キミがいないと僕は 僕じゃないんだ

A-h キミがいないだけで これほど悲しくなるなんて

胸の奥のこの気持ち 炎のように熱く熱く 燃え上がる

キミがないと僕は 僕じゃないんだ

僕がいないとキリは キリじやないんだ きっと

分かり合える日が来る そんな日が来るのを信じて

1コーラス歌い終えると、マーロンが引き継ぐようにギターを鳴り響かせた。マーロン、超カッコイイ！ まさになつてるっす。ギターが落ち着いた所で歌い始めた。

小さな炎が心の中で灯つた あの日の想いが蘇る

そして 夢見た未来が 待っている

手をとつ まつすぐ歩いてゆこう

僕はどこまでも歩けるよ 遠く彼方へ

僕はこいつまでも灯し続けるよ 希望の炎

キリがいてくれるから

“ ジャジャーン ”

ギターの音で締めくくつた。ペコリと一礼。

《フォ――――》

拍手の渦が巻き起こる。やつた、大成功！！

観客席の人たちは飛び上がったり、泣いたりしている。マーロンが小声で、

「良かつたマロね！鏡もばつちり撮れてたマロ」

といってスピーカーを指差した。そこにはあたしとマーロンが映るよう鏡が置かれていた。いつの間にか置いてたんだ。前に出てササッと鏡を取り、みんなに笑顔を見せ、舞台そでに隠れた。

そのまま、フィリーの元へ急いだ。マーロンと話をしたかったけど今はそれどころじゃない。リリーが戻ってきてくれないとあたしが魔歌を変えたり、魔術を使つた意味が無い。そう、さつきの魔歌は家族や恋人に向けての大切さを歌つた魔歌だつたけれど、あたしはリリーに分かってほしかった。もちろんフィリーにも。

身近な人の大切さ。2人は近くに居すぎて、ずっと分からなかつた。お互いはいて当然だと思っていたのだ。でもそれはとてもすばらしいこと。あたしは2人といでこう思った。お互いがいてくれないと、リリーとフィリーは本当の自分になれない、と。

「マレーヌ、マーロン！！」

大粒の涙を流しながら走つてくるフィリー。顔を真っ赤にして肩を震わせている。リリーとケンカしたときもこんな感じだったけど、そのときとは違う。前は悲しみ、怒り、悔しさといった負の感情を持つていた。今は感動、それから：

「つマレーヌ、すこかつたよ。つ僕、いつの間にかこんなに涙が出て…」

微かな声だが、口調はハツキリしている。それだけ、心で感じて心が揺れたんだ。

「聞いてると、リリーのことが頭に浮かんで、急にリリーに会いたくなつて」

フィリーは涙が止まらないみたい。だけど、言葉が溢れ出でてくる。

「リリーに謝りたい。リリーにありがとうって言いたい！…リリー

にも聞いてほしかった

「心配要らないマロー！リリー姫にもちゃんと聞いてもらひったマロー。」マーロンが励ますように答えた。続けてあたしも、

「フィリーみたいに、リリーも感じてるはずよ？」と告げた。

「後は出番までにリリーが来てくれればいいんだけど……」

「絶対来る！あの魔歌を聴いたなら来るよ！僕そんな気がするんだ！」

不安げなあたしと対照的にフィリーは強く言い張った。

「リー。どこ？」

風に乗って聞こえた微かな声。すぐにあたしは悟った。

「リリーの声だわ！フィリーを探してる！」

フィリーは敏感に反応した。

「リリー！僕はここだよ！！」

また、涙を流しながら大声で、血を分けた双子の名を呼ぶ。

「どこ？フィリー？」

「いるの？」

双子の姉も、弟の名を呼び探している。フィリーはしきりに辺りを見渡している。あたしは風に乗る声を頼りにリリーを探す。人が多すぎて何処にいるのか分からぬ。

そのとき、フィリーのイヤリングが赤く光る。太陽を浴びて反射する光とは違う。何かに反応するようなハツキリとした光。

「何？これ……」

フィリーが左耳にぶら下げているイヤリングに触れる。すると、光が一直線に光を放つ。

「こっちなんだね！？」

光の方向にフィリーが走り出す。それがあたしとマーロンが追いかける。

「見つけた！リリーこっちだよ！」

人ごみの中、手を伸ばす。2人の涙がとめどなく溢れる。こっちまで泣いちゃうわよ……！」

「フイリーー！？ああ フイリーー！！」

リリーがこちらに駆けて来る。リリーも大粒の涙を流している。周りの人はびっくりして道を開けていく。そして、やつと2人は再会して、抱き合い、その場に座り込む。2人とも名前を呼び合い、子供のように泣いていた。

「マーロン、あたし泣いちゃうかも…」

「マーレーヌよくやつたマロ！魔歌の力で、2人の心を衝き動かすことができたマロ！！」

マーロンは興奮している。

「それに格段に魔歌が上達してるマロー！！」

「ほんと！？あたし上手になつたんだね？自信持つてもいいの！？マーロンに言われて少しずつ自信が湧いてきた。

つて漫つてる場合じやない。感動するのはいいけど、周りの人たちすごい目で見てるよ！大声で、火の王国の姫と王子が泣いているつてとんでもない光景だよ！！2人とも未だに涙を流しているけど、落ち着きだしこの状況をすこーしづつ飲み込み始めたようだ。

「マーレーヌ！早くこの2人を他の場所に連れて行かなきやまざいマロー！」

なかなかその場を動けない2人を見て、マーロンがあたしに助けを求めた。あたしは2人の元へ駆け寄り、

「い、言われなくとも！！

風よ、汝とその使者を運べ！！」

と呪文を叫ぶ。強い風が吹き、4人を空へと舞い上げた。あたしたちは風に乗り、人気の少ない場所を目指した。そして、中央広場からそう遠くない所に降り立つた。時間的にも、休憩が入るから問題はない。

「ふう、2人とも大丈夫？」

あたしは肩で息をしながら聞いた。魔歌を歌つて、色んな魔術を使つたから、結構体力を消耗したのだ。

2人はほこりを払つて立ち上がつた。目は真つ赤で腫れている。予想以上に泣いたみたい。

「ええ、あなたたちにまで迷惑かけちゃったわね。『じめんなさい』リリーが鼻をすすりながら答えた。

「それから、ありがとう。あしたちの為にあの魔歌を歌つてくれたんでしょ？」「…」

「ま、まあね 2人にお互いの大切さを分かつてほしかつたから…」リリーに言われて、照れくさくなっちゃつた。

「リリー『じめんなさい』。リリーは、いつも僕のことを見つけて怒つてくれてたのに」「…」

フイリーがぼそりと呟いた。

「そんなことないわ。あたしこそ、強く当たつて『じめんなさい』！」

リリーがフイリーの手を取りながら言つた。両手をぎゅっと握り締める。

「『じめんなさい』、フイリー・リリー」「…

ほぼ同時に言つた。2人は可笑しくなつて声を上げて笑い出した。それにつられてあたしもマーロンも一緒になつて笑い始めた。笑い声が晴空に響き渡る。

「じゃあ、行つて来るわね！…」

「ちゃんと見ててね！」「…」

順番がきたリリーとフイリーはそう言つて、楽しそうに控え室に向かつた。そんな2人を見ているとわくわくしてきた。

「マーレーヌ、顔がにやついてるマロ」「…」

マーロンに突つ込まれて、顔を引き締めた。

「だつて、楽しみなんだもん！…2人のダンス！…」

と笑顔で言つた。

他愛のない会話をしながら待つていると、

「こよによ、ラストとなりました！…186番、リリー・ファラン

さんとフイリー・ファランさん！..どうぞ～～～！」

だが、2人は出でこないし、照明まで落ちてしまった。周りがざわざわし始めた。何かあったのかな？あたしも不安になってきた。

”ドンドコ ドンドコ ドンドコ ドンドコ”

太鼓の音が鳴り始める。

”ジャーン ジャジャジャーン”

琴の様な音も鳴り始めた。照明がパツとつく。真ん中にはポーズをとつて立つリリーとフイリーの姿。

かつこいい！..目を輝かせた。

音楽が再度強くなり始めると同時に、2人がパツと顔を上げた。しっかりととした眼差しを向ける。

太鼓の軽快なリズム。広がるような琴。高く響く笛の音色。民族的な音楽に合わせてリリーとフイリーの手が、足が、体全体がしなやかに動いている。2人がぴつたりと同じ動きをしたかと思うと、全く違う動きをして、あたしたち観客を魅了する。

音楽が盛り上がりに差し掛かるとき、リリーは左手、フイリーは右手を、音を立てて手を叩き、

「 炎よ、飛び舞う不死鳥となれ！」

手を離した瞬間、叩いた場所に炎が生まれ、その炎は不死鳥の形を成した。炎の不死鳥は3メートルほどの大きさで、2人の周りを優雅に飛んでいる。

「 うおお～～～」

観客が一斉に声を上げた。あたしもマーロンも他の人たちも心を打たれたのだ。魔術で生み出した不死鳥と共に2人はまた踊る。音楽が終わると同時に2人が、

「「ハツ！！」

と叫び、不死鳥を指差した。すると、あたしたちの頭上にいた炎の不死鳥ははじけ、光となつて降り注いだ。夕暮れに染まる空と共に降り注ぐ光は、目を見張るほど美しかつた。

あたしたちは盛大な拍手と歓喜の声で2人を称える。しかし、誰かが、

「あれは何だ！？」

活動していない火山を指差した。そこには真っ赤に燃え上がる何かがいた。もしかして、

「不死鳥！？」

あたしは落ち着きながら、しつかりとした口調で告げた。
さつき、2人が魔術で出した不死鳥とは比べ物にならないくらい大きさだった。火山から離れたこの場所でも分かる。8、いや、10メートルはあるだろう。大きな翼をはためかせ、こっちに向かって飛んでくる！悲鳴をあげて逃げ惑う人たち。しかしあたしはその美しさと迫力に立ちすくむ。マーロンはあたしにピッタリくつついで怖がつていて。コンテスト主催者や警備員たち、リリーとフイリーは舞台から降りて、必死に人々を誘導させている。

「マーレーヌ、逃げるマロ！…ここは危ないマロ！」

マーロンがあたしの服を懸命に引っ張る。危ないのは分かつてる。だけど、あたしは不死鳥を待つていなくちゃいけない気がする。それに、

「待つて、マーロン。聞こえない？メロディが…。あたしには聞こえる…！」

そう、風に乗つて微かにメロディが、魔歌が聞こえる。その魔歌があたしの体に沁みこんでくる。マリア・ピアーノの魔歌、これが伝説の魔歌…！意識がだんだん遠のいてゆく…。あたしの目の前に不死鳥がゆっくりゆっくり降下してきた。

「マーレーヌ、しっかりするマロ！」

マーロンが叫び、あたしの腕を揺する。はつと我に返る。

”ブワ――――”

熱い！熱風が吹き上がり、髪やドレスがバタバタと音を立てる。周りに誰もいない。不死鳥は地面に足をつけると。野太い声を辺りに響かせる。

「我は、不死鳥。フェニックス 100年に一度、再生のときを迎えた。お主は、マリアか？」

不死鳥はあたしの頭の中に、それでいて辺りに広がる声で話す。あたしは手をぎゅっと握り締めた。

「あ、あたしはマリアじゃありません。マリアはあたしの『先祖様でマリアンヌ・ピアニコ』といいます！」

「先祖、だと？ マリアは、死んだのか？」

また質問をしてきた。100年前にマリアに会ったみたい。でも、それから100年経つた訳だから、こんな質問しなくても…。それでも聞かれたのだから答えた。

「100年前に消息不明になつて、亡くなりました」

不死鳥は一息ついて、

「そうか。マリアから、託された、魔歌は、お主に届いたか？」

抑揚のない声で不死鳥は話を続ける。

「はい！ あたしの体の中に沁みこんでいます！」

あたしは声を張り上げた。

「ならば、安心だ。我はまた、100年の眠りに、ついで

”パア――――”

白い閃光が不死鳥から放たれた。眩しくて目が開けられない。周りから悲鳴が聞こえる。その中で、不死鳥の声が頭の中で響いた。その言葉は思いもよらないことだった。

「え、そんな！ うそでしょ！？」

驚きのあまり呟いた。返事が返ってくることはないけど…。

そんなことがありえるわけない！ でも、不死鳥が嘘をつくとも思えない。

「マレーヌ、マレーヌ！――目を開けるマロ！？」

パツと目を開けた。目の前にはマーロンと双子の姿。不死鳥の姿はもう無かつた。

「大丈夫よ。ふ、不死鳥は何処へ？」

ドキドキしながら確認した。しかし、

「それが閃光のせいで見えなくつて。誰1人としてわからないと思うわ」

「でも、被害はなかつたから良かつたね…」

双子がそう言つた。あたしは力なく頷いた。そして、2人は観客を呼び戻す手伝いに行つた。

「マーレーヌどうしたマロ？何かあつたんじゃ…？」

マーロンが察したように聞いた。あたしはまだ心の整理がつかなかつたので、

「後でゆっくり話すわ。今はコンテストの結果に集中しましょ、ね？」

マーロンの目を真つ直ぐ見ていつた。何か言いかけたマーロンだつたが、あたしの目を見て理解してくれたようだ。

「ありがと、マーロン」

第6話 大切な人へ（後書き）

どうでしたでしょうか??

2人は仲直りできて嬉しいばかりです～！

さあ、火の章も終わりへと向かっていきます！！

読んでいただきありがとうございましたペコ

次話もお楽しみに～ペコリ

第7話 結果発表！？（前書き）

「コンテストの結果がついに発表されます！！

結果はどうなるのか～～！？

ପରିବାର

第7話 結果発表！？

満席の客席は落ち着きを持たず、興奮を隠せない。

「コンテストはすぐに再開。という訳にもいかなかつた。被害は出なかつたけど、審査が長引いたの！結果はどうなつたのか…。長引くほどだから…。うう、考えるのが怖い…！」

「大変長らくお待たせしました！！ファイアーリ・1・コンテストの審査発表です…。」

「――イエ――――イ――！」

「受賞は優勝、準優勝、特別賞が1組ずつ、審査員賞が3組ずつ。計6組です！」

6組があ、狙うは優勝！心臓がバクバクする…！！

「まず、審査員賞からです。1組目は…」

審査員賞では呼ばれなかつた。安心したような、不安なような。残りは3組。この中に入つてればいいんだけど…！

「次に特別賞の発表です！特別賞は、エントリー？25ポラポラ団の皆さんです！！おめでとうございます！！」

受賞したポラポラ団は、7人の人たちが愉快な芸を披露してしたものだつた。サークスを見ているような気分でかなりの観客の人たちが楽しんでいた。

「続きまして、準優勝です。準優勝は、エントリー？110マレー・ピアニコさんとマーク・D・ムーケさんです！おめでとうござります！！！」

「やつたー！マーク・準優勝よ…！」

あたしたちの名前が出た途端飛び上がつた。周りの田も氣にせず、舞い上がる。マークを掴んで、ぎゅっと抱きしめた。マークがペチャンコになりそつたので離してあげた。

「やつたマロー！優勝じゃなかつたのが悔しいマロね…！」

「では、優勝の発表です！！！唯一、栄光に輝いたのは……？」
と言つたが、満足している様子だつた。あたしも同じ。

”ダダダダダダダダダダ
ダダン”

照明が落ちて、ライトが回り、太古が鳴り響く。そして照明がパツとつく！

「ハントロー? 186リリー・フランセスセントフィリーリー・フアラン
さんです……おめでとうござなーーす……」

拍手喝采の中、あたしの隣で泣き声が…。リリーとフイリーだ。

「...みたひせ、一こに 優勝

「お前ら、よくやつたぞ！－うつ、先生はうれしいぞお！」
3人で立きながら喜んでいた。

「受賞された6組のみなさん、ステージへお上がりください！！表彰式を行います！」

ヨリモアアーネスト・ヘミングウェイ

あたしたちは賞状と小さな銀色のトロフィーを貰った。リリーとフイリーは賞状と金色の大きなトロフィーと真っ赤なロープを貰っていた。羨ましい！！！

最後に優勝した2人が挨拶をした。

「みなさん、リリーです。あたしたちは優勝を目指してずっと頑張

つてきました！今この瞬間をいつまでも心に刻み、一生忘れません！本当に優勝をありがとうございます！！！」

「僕はこのコンテストで、リリーと言う双子の存在を、改めて大切だと感じました。リリーがいてくれたから、僕がいて、ここで優勝することができました！！もちろんたくさんの方々が支えがあっての優勝です！！」

2人の挨拶にはまた拍手喝采だった。会場全体が拍手で包まる。そんな中、2人を見つめながら、

「双子つていわね」

賞状を大事そうに抱えるマーロンに耳打ちした。

「そうマロね。マーレーヌに双子や兄弟がいなくても、オイラがついてるマロ！」

マーロンが胸を張つて囁き返した。あたしはその言葉にちょっと照れながら、

「そうね。マーロンはあたしの家族で兄妹だもんね ありがと！」

感謝の言葉をそつと呟いた。

あたしたちの準優勝も、双子の優勝も、マーロンの言葉も心の底から嬉しく感動で…。会場の人たちの笑顔も、歓声も心を打つもので…。

大歓声に包まれながらコンテストの幕は下りた。

火の城に戻ると、リリーとフイリーの優勝、あたしとマーロンの準優勝でお祭り騒ぎだった。

前夜祭であんなに大騒ぎしたのにまたまた大騒ぎ…？と思つたけど、王様たちがお祝いしてくれるのを見ると、すごく気持ちが良か

つた。あたし以上にリリーとフィリーは喜んでいた。だって、ずっと練習してきて想い入れあるからね。みんなにトロフィーと賞状を自慢げに見せていた。王様と王妃様は田に涙を溜めて、とても嬉しがっていた。

夕食会は1時間ほどで終わり、部屋に戻りつとした。

「マーネ、ちょっと…」

リリーがあたしを呼び止めた。隣にフィリーが立っていた。

「今日は夜更かしOKって言われたの！」この後あたしの部屋に集合よ

「お菓子いっぱい用意しておくからーお菓子パーティーだよー…もちろんマーロンも来てね~」

ウイーンクをするリリーと親指を立てるフィリー。あたしは顔を輝かせて、満面の笑み。

「分かった！部屋に戻つて、すぐ行く…！」

走つて部屋に戻つた。

部屋に戻つてトロフィーなどをテーブルへと移した。そのまま眺めてたい所だけど、お菓子パーティーに呼ばれたんだから急がなくちゃ。マーロンを部屋から出して着替えた。ドレスを脱ぐと、体が軽くなつた。きっと一緒に緊張や疲れがとれ、心も軽くなつたんだと思う。ルームウェアにパークーを羽織り、マーロンを部屋に入れて聞いてみた。

「マーロンもいくでしょ？お菓子パーティー」

「ん~っと、行くマロ」

マーロンは少し考えて答えた。あたしはククッと笑つて、

「フィリーに捕まるのがこわいんでしょ！？」

ズバリ言つてやつた。

「まあ、それもあるけど…。マーネの話聞いてないマロ~」

「そもそもと言つた。あたしは何のことか分からなくて、口を開こ

うとした。

גָּדוֹלָה...

「ああ、リリー姫の部屋に行くマロ～～」

と遮られてしまった。疑問を抱えたまま、足を運んだ。

リリーの部屋では既に双子が準備をして待っていた。お菓子とジュースがたくさん置かれた丸いテーブル。リリーに手招きされ、リリーの傍のオレンジ色のクッショングに座った。マーロンが困っているとフイリーが一回り小さなクッショングを出した。フイリーは二口して、リリーはあきれていた。とりあえず、出されたクッショングに座り、お礼を言うと固まってしまった。

「あ、どうあれ、盛り上がるわよ!!」

リーリーが第一声をあげた。緑にて、リーリーが

治傷筋と傷筋を被して草木が死んで

を上
げた。

かんはうい！」

”力”

心地よい音が響いた。そこから、他愛のない会話が始まった。同じ年頃の子とこんなに話すの初めて〜！リリーとフィリーが王家のだからってのも普通に話せるのかもしれないけど。でも、こんなに簡単なことなんだもん。他の子達とも普通に話せるようになつて、仲のいい友達ができるよね！？

パレードの話になつていた。

「ねえねえ、あの時、リリーとフイリーのイヤリングが光ったけど。あれって、アミニュレットの効果だよね？」

あれ？ で、『ハリソン』の効果だよね？』
あたしはすつと黙つてたことを口にした。つ

再会するとき。イヤリングから赤い光が放たれた。2人のイヤリン

グが共鳴するようにな。

「お父様に聞いたら、心の意思がイヤリングに伝わって、2人を巡り会わせる力となつた…んじゃないかって」

とリリー。

「このイヤリングは昔、僕らみたいな双子が使ってて、2人が離れになつたとき、会いたい！つて強く願うとお互いのイヤリングが反応したんだって。だから、このイヤリングは気持ちをつなげる、アミニコレットだつて言つてたね」

とフイリー。

「ふーん。じゃあ、あの時、2人の気持ちはつながつてたんだね」「あたしが思い出しながら呟いた。2人は顔を見合させて、苦笑した。照れ隠しだな。ほんと双子つていいな」。

そしてリリーは何かを思い出したみたいで顔を曇らせた。心配して声を掛けると、

「あのね、あなたたちを呼んだのは相談があつたからな」
そして、リリーはパレードでの出来事について、重々しい口調で話し始めた。

「パレードでフイリーとケンカしたでしょ？今思い返してみると、気になることがあつてね。マーチに会う前、中央広場に向かつてた時…。フイリーがトイレに行つてる間に女の人に声を掛けられたの。その人つたら頭からすっぽり真っ黒のローブを被つて、見ながら怪しそうだつたわ」

黒いローブの人…。

「あたしも話しかけられた…！その後、黒い香水をもらつた…！」
ふと思いつ出して立ち上がつた。

「そう、あたしも貰つたの。リラックス効果があるつて言われて…」
リリーはあたしに座つてと笑いかけ、話を続けた。

「どこか行つちゃつたから女人人は知らないけど…。気にせずつけてみたら、なんだか嫌な気持ちにが溢れてきて…。怒りとか悲しみとか嫉妬とか、色んな負の感情が…」

と言つと身震いした。フィリーが話を紡いだ。

「僕が戻つてくると、リリーの足元に割れたビンが合つて…。香水は無かったよ。

どうしたのつて聞いたけど、既に機嫌が悪くて…そこまで言つと、フィリーも黙つてしまつた。あたしは自分の体験を話す。

「あたしは他の人ぶつかつて、ビンが割れちゃつて、香水は魔術で消してもらつたの。だから、何もなかつた…」

言つた後に、あたしはラッキーだつたんだなと思つた。あの香水を知らずに使つてたら、あたしも大変な目に…。想像しただけでも背筋がゾクツとする。あつ。あの後貰つた、ハーブ…ポケットに入れたままだ。くしゃくしゃになつてゐるかな？

「そつか、良かつたじやない。あたしたちに配つてたつてことは他の人たちにも…」

リリーがそつと呟いた。みんな一斉に顔を強張らせた。と、ここでマーロンが切り替えるように、

「あつ、マレーヌも何か他の話があつたんじやないマロ?」
明るく言つた。まだ何の話か分からぬ。そんな顔をしてると、「ほら、不死鳥に会つたとき、何かあつたつて…。後でゆつくり話してくれるんじやなかつたマロか?」

思い出した

硬直するあたしをよそにリリーとフィリーは楽しそうに、

「でも、本当に不死鳥が出てくるなんて思わなかつたわ」

「うん!しかも、マレーヌは不死鳥と話してたし。あれ?マレーヌどうしたの…」

フィリーがあたしを覗き込む。あたしは震えながら、

「あのね、不死鳥が消えるときに、あたしにあることを言つたの」
俯きながら話すけど、みんなの視線を感じる。言つてしまつてもいいのか?こんなこと信じるのかな?でも、言わなきや。顔を上げ、とんでもない事実を告げた。

「不死鳥が……」マリア・ピアーノは生きている”って……
その瞬間、静寂が訪れた。

「それは、ありえない話では……ないかもしないマロ」

静寂を破ったのはマーロンだった。みんなが彼を見つめる。

「不死鳥は『不死の玉』と言うものを持つていて、それを授かつた者は不死…、不老不死になれるって伝説があるマロ。で、でもあくまで伝説マロよ！？」

「そんな伝説があつたなんて。でも、その件と黒いローブの女性の件は関係なさそうだね！」

フイリーがなるべく、明るい口調で。続けて、

「でも、調べないと駄目だね。マレーヌ、この2つの件は僕らが引き受けれるよ！」

頼もしい言葉がフイリーの口から出た。

「マレーヌは、旅で忙しいだろうし、不死鳥のことにについては火の王国の方が詳しいしね！黒いローブの人の件は被害に遭った人たちは火の王国にいるだろうし！」

「そうね！フイリー、あんた意外とやるじゃない！」

頼もしいフイリー＝マリーは驚きの声を上げる。フイリーは照れて、頬を赤らめている。

「ありがとう…すゞ」へ助かる！あたしもマリアについて詳しく調べてみる。全部2人に任せきりは駄目だもん！」

「このことはあまりしゃべらないほうがいいマロ。この2つの件はみんなの秘密マロ…」

「おお、それってかっこいいわね。まあ、しつかり調べて解決させましょ…！」

マーロンの意見に賛同するリリー。

「これから大変なことが起るかも知れないけど、僕たちならやれるよね！？」

「ええ、絶対やれるわ…がんばりましょ…！」

「…」

フイリーの言葉にあたしが力強い返事を返し、みんなで頑張ることを決意した。

「ところで、マーレース、あなた火の王國はいつ出発するの？」

「えっと、明日の午前中には出発しておこうかなって。次は水の王国に…」

「わかったわ。フロリーの手続きをしておくわ

リリーが早口で言った。手続き？質問？と思いついたけど、先を越された。

「もう遅いし、寝ましょっか。マーレースたちは明日出発するんだじ。おやすみ…」

「おやすみ…」

リリーは片づけを始め、手伝いを申し出たが「早く寝なさい」と言われた。朝も早いので甘えさせてもらつた。

楽しいお菓子パーティもお開き。厄介な事だらけだけど、きっと大丈夫。なんだか強くそう思えたの。

第7話 結果発表ー? (後書き)

どうでしたか?

問題ばかりですが(汗) きっとマーレーヌたちなら心配は要りない
!ハズ?

最後まで読んでいただきありがとうございました! ごめんなさい

感想などお待ちしております♪♪

マローゲ 悲しい別れなんてないーー

～翌日～

「リリー、フィリー、短い間だったけど、本当にありがとうございました。」
あたしは双子に心からの感謝の気持ちを込めて言った。潮風があたしの髪を優しく撫で付ける。ここは火の王国の船乗り場。リリーが気を利かして、水の王国行きフヨリーを手配をしてくれたのだ。
「マーレース、魔歌探し頑張つてね！あたしたちも色々頑張るからーー！」

「うん！あたし、他の国の魔歌もちゃんと手に入れてみせるーー」
笑顔で言葉を交し合へ。そして、無言であたしはスッと髪にあるものを着ける。すると、同じ事を考えたのか、リリーもあるものを着ける。

「あたし、これ一生大事にするーー」

着けてから同じ言葉を発した。あたしはシュシュを。リリーは髪留めを。

「はもつちやつたね」

「ふふ、シンクロだわーー」

お互に微笑んでぎゅっと抱きしめた。隣でフィリーが

「マーロン、僕、船に余えなくなると思つて、さびしこよーー」

涙声であたしじゃなくて、マーロン。ちよつと期待しちゃつたじゃない。

「オイラは安心…じゃなくて、寂しいマローー」

マーロンはぎこちなく答えた。吹き出しそうなやり取りだ。マーロンはフィリーに抱きしめられて、せつと放してもらえると、わらとあたしの近くに逃げてきた。そして、慌てて言った。
「リリー姫、フィリーをしつかり鍛えてやつて…じゃなくて、フィリーと仲良くしてくださこマロ。マーレース、時間マローー

「 もう、マークонтたら。フィリー、あなたは結構強いんだから！
！リリーと一緒に頑張つてね！」

双子は満面の笑みで頷く。

「 じゃあ、お別れだね。さよなら、リリー、フィリー
別れの挨拶を告げて、フィリーに乗り込んだ。

” ボ————”

船の汽笛がなる。出航の合図だ。階段を駆け上がり、甲板に向かう。そして、甲板から身を乗り出して、手を振り叫ぶ。

「 ありがとう————！————！」

船乗り場から、双子が手を振り返す。

「 バイバイ！」

あしたたちはお互いが見えなくなるまで手を振り続けた。

汽笛の音と共に不死鳥の鳴き声が聞こえた気がした。

ヒューローク 悲しい別れなんてないーー（後書き）

火の章やつと完結ですーー！

みなさんのおかげで完結までこぎつけました！

本当にありがとうございましたーー！

次回から、水の章に突入しますーー

これからもどうぞよろしくお願いします ペコリ

プロローグ 魔術・魔力について

この世界に住む人は大抵魔術が使える。

それは自分の中に魔力が存在しているから。その魔力で魔術が使える。

魔力は普通の人より、あたしたち王家の血筋を引くものが強いとされている。

普通の人で強いって人もたまにはいるけど、

基本的に、王家の人が強い…らしい。

強いから、国を支配できる。魔力がないと、人々に認めてもらえない場合があるからね。

皮肉な話よね。

今は力で支配することはないけど、でも、魔力を持つてるほうがいいんだって。

それじゃあ、魔力を持つてない人はどうなるかって？

あたしには分からぬ。

普通の人が魔力を持つていなければ別に問題はない。

でも、王家の人の場合…。どうなるんだろうね…。

水の王国。豊富な水に囲まれた清らかな国。

水のように清らかな心をもって

水のように流れに逆らうことなく意志を貫く人が待っているはず。

だから、水の王国の魔歌は水のように汚れのない美しく澄んだ魔
歌なんだろうな。

プロローグ 魔術・魔力について（後書き）

水の章、始動です！！

私も学生でなかなか更新できませんが…

温かい心で読んでいただけたらと思いますペコ

次回からお楽しみに！！！

第1話 船の中（前書き）

運動会も終わり、頑張つて更新したいと思います！

始まりはフェリーからです。

ソリで新たな出会いが……！

ビハビハ

「ああ～暇だわ～～」

水平線をボーッと眺める。

火の王国から水の王国行きのフェリーに乗つて1時間。あたし、船に乗るのは初めてで、ひたすら待つのは苦手。だから退屈だ！！！後1時間も何をして待つてろつて言うの！？

「仕方ないマロ。だつて、水の王国まで遠いマロから

マーロンは床をただよいながら呟いた。

「マーロン、あたし寝るね。時間になつたら起こしてうつだ～い」力なく言つて、客席に戻る。そこに、

「お姉ちゃん、お船の後ろにプカプカ浮いてるの」と小さな男の子が服を引つ張つてきた。フェリーの後ろを指差している。

「んん？？そこに連れてつてくれる？マーロン行くわよ～」

興味をそそられ、あたしは男の子に案内してもらつた。眠気も吹き飛び、わくわく。

男の子が連れてきたのはフェリーの後方で下の海を指差す。

「あのね、このロープの先に何かくつついてるの。海の中でね、あつ、ほらあれ！」

手すりにきつく縛られたロープは海の中へ消えたいつた。でも、光が反射したときに大きなタルが見えた。異常なほどに大きなタルから筒のよつなものが出てている。

「怪しいわね。ありがとね、僕。危ないかもしれないから、中で隠れててね？」

男の子はこくんと頷いて走り去つた。

「オイラが引き上げるマロー！」

マーロンが両腕にはめられたリストバンドを外す。

マーロンは20センチくらいの妖精だけど、見た目と裏腹に怪力なのだ。マーロンを甘く見ると痛い目見るのよ。普段はリストバンドで力を押さえつけるから心配要らないけどね。それに、彼は温厚な性格だから、怪力で暴力を振ることなんてないから。

「うぬぬぬぬぬぬ～～～マロオー！」

”ザバーン”

お見事！ロープが波打つて、タルは空へと飛び出した。そして、タルは甲板へ向かつて勢いよく…

”バリバリバリ”

甲板に激突し、タルは真っ二つに割れた。中から生まれたのは…？

「いつてーなーって…お前！？」

「ハラペコ三人組！」

コツペ・ラハ、チョーウ、ナノレスのハラペコ三人組が生まれた。じゃなくて、出てきた。

「うう～2度と会いたくない奴らマロ～」

マーロンの言葉にあたしは同感だった。

「なんだと～」

「だと～」

「だと～」

ペツコ・ラハの後に続くチョーウとナノレス。しかしここで、突然

然声が響いた。

「ここですわね！！」

3人組の後ろから、長く艶のある黒髪の女の子が現れた。あたしと同じくらいの年。

「ここは危ないわ！戻つて！！」

あたしはとつさに叫んだ。人質に取られたりしたら大変だもの！女の子はワンピースの上に着物を羽織っている。淡い青色の布地に、水の模様が描かれた高級そうな着物。長い髪を後ろで束ね、い

かにもお嬢様。しかし、この状況を見て、逃げずに声を張り上げた。

「そこのおかしな3人組！！ここで何をしているのです！？」

か弱いイメージが吹っ飛んでいくような口ぶり。ハラペコ3人組

は、目を丸くしている。

「今だ！魔術を使おうとした。

「すぐに答えられないと言うなら、見過せませんわ！観念なさい！」

「水よ、龍となり邪悪な者を追い払え！」

女の子に先を越され、魔術を唱えられた。海の水が伸びてきて龍となつた。龍は3人組に向かい、大きな音を立てて、3人組を空高く飛ばしてしまつた。そして、また捨て台詞を残す。

「船の豪華な食事が食べたかつただけなのに――！」

「ハラペコ、グ――」

「キラーン」

「あなた方、大丈夫ですか！？」

女の子が心配そうに駆け寄つてきた。あたしたちは苦笑して、

「はい、大丈夫です。いいとこ取られちゃつたね、マーロン」

「そうマロね。それにしてもあの3人、こりないマロね」

安否を確認すると、女の子は頷いた。

「私、サラサ・イネットと申しますわ」

その名前を聞いてマーロンが目をぱちくりさせた。

「イネット？王家のものマロ？水の王国の…」

「ええ、そうですわ。水の王国の姫ですわ。もしかしてあなた方も

？？」

「あつ、はい。あたし、風の王国の姫で、マリアンヌ・ピアーノです。こっちがお供の…」

「マーロン・D・ムーケですマロ。なぜ、すぐにお分かりに？」

マーロンが自己紹介をして、唐突に言つた。

「マリアンヌさんは生誕パーティで有名ですわ？それに、火の王国のコンテストでお2人は準優勝になられたと聞きましたの。15歳と準優勝、おめでとう」

笑顔で答え、お祝いまでしてくれた。

「ありがとうございます。えっと、サラサさんは何歳なんですか？」

「私も今のところ15ですわ。でも、今年で16になりますの」

「あたしの一つ年上か。それにしても年下と分かっても丁寧なしゃべり方…」

「とにかく、ここ立ち話するのもなんですから、一旦客室に戻りましよう？」

手招きをして、サラサさんが言った。

連れてかれたのは一般的の客室じゃなくて、サラサさんの個室。中にはサングラスをかけたスーツの男性が、白ひげのおじいさんが待っていた。スーツの人はドアのすぐ近くで、おじいさんは窓の近くの椅子に座っていた。

「じいや、ウォーテル、今戻りましたわ」

サラサさんが静かに言った。じいやさんは口元を近づけ、ひげで隠れた口から声を出した。

「心配しましたぞ、姫！ はて、この方はどなたかの？」

「ひからはマリアンヌ・ピアーノさんとマーロン・D・ムーケさん」「ほつー・ピアーノとは風の王家の者ではござらんか～。わたくし、お座りください」

椅子を指差して言った。あたしは慌ててじいやさんに向

「あ、あたしは大丈夫ですよ？？お構いなく、座つてください」

「いやいや、このじいは大丈夫ですぞ。じいだと思って甘くみなさんな、ほつほつほ」

と軽く笑つて、あたしを椅子に座らせた。サラサさんはふふっと微笑み、

「マリアンヌさんは魔歌探しの旅で水の王国に？」

「そうです。あつ、マリアンヌじゃなくてマーネヌって呼んで下さい」

「あらそうですの？じゃあ、私のことはサラサとお呼びになつて。

わたくし

それに敬語は使わなくても良くてよ? マレーヌ、マークン、水の王国へようこそ。でも、まだ水の王国じゃありませんわね「

楽しげなサラサ。

「ありがとうサラサ。少しの間よろしくね」「なんだか楽しくなりそう。

「ええよろしく。こちらの紹介がまだでしたわね。こちらはじいや、ロベル・タイタン。水の王国に勤めて長いの。王様の補佐役ですわ。

そして、こちらがウォーテル。ウォーテル・スイーザ。わたし私の執事兼ボディーガードよ

「どうぞ、よろしくですじや」

「…どうも。自分のことはお気になさらず」

2人は挨拶をして、頭を下げた。あたしも慌てて頭を下げた。

「あの、サラサ姫は何の御用事でこの船に乗つてるマロ?」

「不死鳥パレードに呼ばれてましたの。でも、開会式しか出席してなくて…」

サラサはマークンの質問に恥ずかしそうに答えた。

「実は、開会式から体調を崩してて…。パレードやコンテストが拝見できなくて、残念でしたわ。今はもう元気ですけれど」頬を赤らめた。あのパレードを見られなかつたなんてほんと残念。あたしは励ますように声を掛けた。

「そうだったんだ。でも、来年もあるだろ? から、大丈夫よー」

「うふふ、そうね。ありがとうマレーヌ」

といった風に楽しい会話をして、水の王国に到着するのを待つた。

「マレーヌ姫よ、我が国についたひつなかるのじや?」「じいやさんに聞かれた。

「えつと、まず王様たちに挨拶して…。それから魔歌を探すので…」

「そうですか。よかつたですね、姫」

「ええ？ その魔歌はすぐに用意できるんじゃなくって？」

「マリア・ペアーノが納めた魔歌ですからな。本で読みましたが、その国で起こる難を解決することで魔歌が手に入るそうですが、へえ、やうなんだ！ でも、火の王国の難つて？ リリーとフイリーを仲直りさせたこと？？ 仲直りで魔歌が手に入るつてどうなのかな…。コンテストで準優勝したこと？ でも、普通なら優勝だよね。とにかく、水の王国でも頑張らなくちゃ…！」

「皆さん、着いたようですよ」

ウォーテルさんが静かに告げた。いよいよだわ！ 拳をグッと握り締め、気を引き締める。サラサが、

「もちろん、私達と一緒に城まで行かれるのよね？」
とこつこつした。あたしはペコッと頭を下げて、

「よろしくお願ひします！ ！」

「ひつひつした。

「よいよ水の王国だ！！

第1話 船の中（後書き）

水の王国のサラサ。礼儀正しく、真っ直ぐな女の子ですーー！

水の王国で、何が起るのかーー！

最後まで読んで下さりありがとうございましたーー！

次回もよろしくお願いしますペコペコ

第2話 魔歌の行方（前書き）

第2話です！！

水の王国に到着ですね～

かわいい新キャラもちょっとびり登場です！！

どうぞ、お読みください

第2話 魔歌の行方

馬車に揺られること、数時間。二二三〇分は街を通りていた。ここまで辿り着く間、川がたくさんあった。そして、その水源は：「おつきーい！あの真ん中にあるのが、水の城！？」

声を上げるほどに広がる湖。水平線にのび、底が透き通つて見える。その真ん中にたたずむ、和風なお城。水の王国はこんな風になつてるんだあ！

「城に行くには、この屋形船に乗つていきますの
サラサはにこやかに屋形船に向かう。あたしとマーロンも後に続く。

屋形船の中は、畳が敷き詰められて、中央には長いテーブル。壁は全て障子張りで、外の景色を楽しめるようだ。中央にサラサ、その隣にじいやさんが座る。あたしはサラサの田の前に座つた。ウオーテルさんは入り口の近くで立つていて、サラサは正座をして、行儀よく座っている。これが大和撫子やまとねじこってやつね。

「時間は掛かりませんわ」

サラサが静かに言つた。すると、じいやさんが、

「マレーヌ様よ、そなたはどのようにして火の王国の魔歌を手に入れたのじや？」

興味深そうに聞いてきた。あたしはざつと火の王国であったことを説明した。でも、マリアが生きているかもという事と、あたしとリリーに起きたことは伏せながらだ。説明が終えると、サラサはじいさんは田を爛々と輝かせていた。

「双子さんの仲を元通りにさせて、しかも魔歌が手に入るなんて素晴らしいわー！」

「姫、その2つはきっと関連があるはずじゃ。不死鳥と言つのは肺の中から100年に1度よみがえる伝説があるんじや。まあ、それ

はマーレーヌ様が体験済みのようだしのぉ。

しかし、他の説に不死鳥は初めはただの鳥であり、双子であった。片割れが死んでしまったときに、生き残った方も自らの命を片割れの死体と共に炎で焼いてしまったのじや。すると、灰になつて無くなつたつの体が1つとなり不死の魂を得たと…

そ、そんな伝説があるんだあ。

「じゃから、ただ不死鳥が蘇るのを待つてるだけじゃ駄目だつたかもしれんのう。双子の仲を元通りにさせると、魔歌が手に入ったのだろう」

あたしは驚いた。だって、あたしがパレードにいたのも偶然だつたし、リリーとフィリーがケンカしたのも、仲直りさせたのも偶然だし。ただの偶然だと思ってたけど、こうなる運命だつたのかも…。

「マーレーヌ、その魔歌を聞かせてください？」

サラサが期待を込めた目で言った。マーロンも続けて、「そういわれれば、1度も歌つてなかつたマロね。マーレーヌ、聞きたいマロ～！」

とマーロンまで言つ。あたしは目を伏せ、弱々しく事實を述べた。

「…実は魔歌が歌えないの」

「「ええ！？」

「でも、手に入れたんじやなくつて？？」

「そマロ～自分で言つてたマロよ…？」

2人が慌てて言つた。そんな2人にあたしは訂正した。

「手に入れたし、体の中に沁み込んでるわ。上手くいえないけど、歌おうとすると、声が出なかつたり、歌詞やメロディーがふつと消えたりするの…」

胸の前で両手を握り締める。

「何度も何度も歌おうとしたのよ…？でも、歌えないの」

力なく言つた。歌おうと幾度も挑戦した。でも、魔歌はあたしの奥底に引っ込んでしまう。もしかしたら、魔歌は手に入つてなくて、自分でそう思い込んでるだけなの？

だけど、確かに魔歌は 1文字1文字、1音1音は 、あたしの体に沁みこんで血液のように流れている。

「きつと、それは…」

じいちゃんが声を漏らした。みんなが揃つてじいちゃんを見る。「きつとですな、7つの魔歌が全て揃い、ふさわしい時に、ふさわしい場所で、ふさわしい人を前にして歌えるようになるんじや… つと思ひますぞ」

落ち着き払つて、自分の考えを語りじいちゃん。ふあー、納得かもーー！

「そうかもりせませんね！… にしても、じいちゃんはなんで、マリアの魔歌についてそんなに詳しいんですか？」

じいちゃんに聞いてみた。今までの話の中でじいちゃんはマリアの魔歌について色々知つていた。じいちゃんはほつほつほと笑つて、「わしは長く水の王国に勤めておりましての。新米のときは城の図書館の担当でな。その時に書物を読み漁つたのじや。早く上級の仕事をしたかったから、あの時は必死じやつた…」

遠い昔を思い出しがれを細めている。マーロンが耳元で、

「マリア・ピアーノや魔歌についての本が沢山あるつて事マロよー。調べてみる価値はあるマロー」

と囁いた。マーロンにしてはいい考え方じゃない

「じいちゃん、そういつた書物はまだありますか？」

じいちゃんは首をひねつて、

「つむ、わしが担当しつつたのも何十年前だからね。ある分は用意しておきますぞ」

と言つてくれた。あたしは即座にお礼を言つた。

「ありがとうございますー！助かりますー！」

やつた！これでマリアの事、いっぱい分かるかも。魔術歷ではそんなに詳しく述べなかつたもんね！（やつたかもしれないけど、あたしはモダンの話をぜんぜん聞いていなかつた）

「みなさん、到着です」

ウォーテルさんが呟いた。続けてサラサが、

「マレーヌ、マーロン、改めてよつこや！水の王国へ！…」

水の王国！あたしは期待で胸を躍らせて、足を踏み入れた。

「サラサ様～～！お帰りなさいませ～～～～！」

屋形船から降りると、白い生き物が丸い体を一生懸命揺らして近づいてきた。

「コテツー！ただいま帰りましたわ～」

サラサが白い生き物に駆け寄り抱きしめる。コテツと呼ばれた生き物は、つるつるの肌をもつたアザラシだった。愛くるしげくくりくりした黒い目。鼻と口は小さく、突き出た鼻にはひげがピョコンと生えていた。かわいい～！あたし、こんな間近でアザラシ見たの…初めて～！

「サラサ様、そちらの方は？？」

コテツ君が短いヒレであたし達を指しながら尋ねた。そういう姿にきゅんとする。

「こちらは風の王国のマレーヌ・ペアーナさんとマーロン・D・ムーケさんですわ。魔歌探しの旅でこちらにいらっしゃったの

「それはそれほどうもです～。僕はサラサ様のお供でコテツと申します」

「よろしくね、コテツ君

「よろしくマロ」

簡単に挨拶をして、サラサが王の間へ案内してくれた。

王の間は最上階にあって、サラサが城の内部を説明してくれた。
「この水の城は地上に3階、地下に5階あります。地下は地中ではなくて、水中に存在しますのよ？」

そして、地上1階は食堂や大浴場など。2階はトレーニングルームや勉強部屋にレッスン室、会議室などがあるらしい。最上階は王の間とお偉いさんを通す部屋があるという。地下は後で案内してもらうことになった。

ちなみに風の城は5階建てで、横に広い。火の城は3つの塔で成り立ち、真ん中が6階、両端が2階建てとなっていた。以上、マレーヌの雑学（雑談）でした。

水の城内部には水路があつて、廊下の片側に小川のように、水が流れている。静かに流れる川を見ていると、心が落ち着く…。そんなことを考えていると、もう着いちゃった。

「こちらが王の間ですわ。わたくし私も帰つたことを告げに参りますわ。さ

あ、入りますわよ？じいや、ウォーテルありがとう」

サラサが振り返つて言った。あたしは返事をして、身だしなみを整えた。じいやさんとウォーテルさんは静かにその場を去つて行つた。

” ギーーーー ”

重々しい音を立て扉が開く。畳張りの豪華な部屋に厳格そうな男性と色っぽい女性。この人たちが王様と王妃様＝サラサのお父さんとお母さん。

お殿様みたいな格好をした王様は、きりりとした顔立ち。男の人にしては珍しい艶のある長髪。色は青っぽい。威厳な態度であぐらをかいて厳格なオーラを出す。

隣には十一単を着て、どこか色っぽいオーラを放つのは王妃様。健康的な唇に色気を感じる。王妃様は黒い髪を頭でまとめている。しかし、耳に垂れていて髪もあり、これまた色っぽい！

あたしは座布団に座るなり、2人のオーラに圧倒され、硬直してしまった。

「父上、母上、火の王国から戻つて参りました。パレード期間中は、わたくし私…体調が優れなくて参加できませんでした。でも、じいやとウオーテルによると、とてもにぎわつていたそうですね」

サラサは背筋を伸ばして、はきはきと話した。こういった場に慣れてるのだろうと、感心していた。

「ほう。無事に戻ることが出来て何よりだ。では、隣の方は何卒こちらへ参つた？」

お腹の底からの低い声。我に返り、緊張氣味に声を出した。

「あたし、風の王国から魔歌探しに来ました。マリアンヌ・ピアーノです」

「オイラはお供のマーロン・D・ムーケですマロ」

マーロンの後にサラサが、

「マーレーヌとマーロンは火の王国で、パレードのコンテストで準優勝をし、魔歌を手に入れたそうですね。丁度、同じ船でしたので、お招きしました」

と経緯を説明してくれた。王妃様が垂れた髪を耳にかけて、

「それは素晴らしいわね。ということは、水の王国の魔歌も探しにいらっしゃったのね？」

色っぽい声で言った。この王妃様、どこをとっても色っぽい。王妃様の誘惑に負けじ?と、

「はいそうです。唐突ですが、マリアが納めた魔歌はありますか?」と尋ねた。いい答えが返りますように…。

「うむ、少し込み入った話があつてな…」

王様が腕組みをして、重々しく話し始めた。

「そなたの国と我が王国の間に、土の国があるのは知つておるか?」

「はい…。100年前の戦争で分かれた小国と…」

魔術歴で習つたことを懸命に思い出して答えた。

土の国は元々、水の王国の領地だつたけれど、戦争の為、分かれ
た国らしい。他の岩や木の国も同じ感じ。反発はさすがにないけど、
国の合併にはどこの王国も踏み出していくみたい。難しい話だ
からよく分からぬけど…。

「つむ、そうなのだ。土の国とはいい関係を築きたいのだが…。
長くの戦争が終わり、土の国が水の王国であつた時、マリア・ピ
アーノが魔歌を納めたのだ。その魔歌は巻物に印され、ずっと守ら
れてきた。しかし、土の国が分かれる時、巻物の半分を持っていか
れてしまった。それから、土の国とは和解できずに巻物も半分な
だ。

「…。」「…。」「…。」
といつても、残つてゐる方も、魔歌が暗号のよつて印されており
読めぬ。学者達が手をゑくしておるのだが、分からぬ状態だ
眉をひそめて、険しい表情で語る。やつぱりそんな簡単にいく訳
ないか。

「この件については試行錯誤が必要になつてくる。長くなつてしま
うが、待つてくれぬか?マリアンヌ姫よ」

「…はい。お願ひします」

そして、部屋を後にし、サラサにこれから寝泊りする部屋へと案
内してもらつた。

水の魔歌は手にいられることができるのかな??

あたしの胸の中には不安の文字がぐるぐると交差していた。

第2話 魔歌の行方（後書き）

どうでしたか？？

なんだか、上手くいく予感がしませんね… ｗｗｗ

どうにか魔歌を手にいりれるよつて応援して貰って… ｗｗｗ

感想などお待ちしています！！

最後まで読んでいただきありがとうございましたペコ

第3話 メールで…

案内してもらつたのは地下3階。サラサや王様達王家の人や王家直属の人たち、位の高い人たちの部屋がある階。ちなみに、地下1階はパーティ会場、地下2階はメイドや家来の部屋、地下4階は図書室や研究室がなど、地下5階は家宝や珍しい品を保管する部屋があるらしい。

あたしは入つて右側の奥から3番目、角を曲がつた部屋になつた。もう一つ角を進むとサラサの部屋、向かい側にウォーテルさんの部屋となつてゐる。

和の部屋かなと想像していたが違つた。意外にも部屋の中も家具も洋風であった。

どのくらいこの部屋で過ごすのかな？部屋に入つた途端、そんなことを思つてしまつた。ネガティブになつちや駄目だぞ、「マレーヌ！
「私は反対側の部屋だから、いつでもお呼びになつてね。私、これからレッスンの予定を立てに2階に行つてきますわ。では、失礼」と言い残して、コテツ君と長い廊下を歩いて行つた。それを見送つて荷物を整理した。そして、ため息をついた。

「ふう、着いたのはいいけど、どうなるんだろう？何だか、上手くいきそうにはないね」

「マロ、火の王国では思いのほか、すぐに魔歌が手に入ったマロね。今回は水と土の和解で魔歌が手に入るつて感じマロ？？」

苦笑いするマーロン。

「むりむりむりー王様達があんなに悩んでるんだから、あたしが出来るわけないじゃん…。とりあえず、風の王国とリリーたちに連絡入れとこうかな」

あたしはマイコンを取り、まず風の王国向けにメールを作成した。

「えっと、まず、火の王国の魔歌を手に入れましたっと

マイコンのタッチパネルで文字を入力していく。

「コンテストで準優勝したことも伝えておけばいいマロー。」

「そうね、喜ぶかも。」

といった具合に風の王国とコーヒーたちに向けて、メールを作成し送信までいたつた。

「無事完了！早く返信こないかなあ

メールを送る相手があまりいなかつたあたしは、メールの送信者がいること、先進が来ることを嬉しく思つた。マイコンをテーブルにおいて、椅子に座つてウキウキしながら返信を待つた。その様子を見たマーロンが、

「何だか、この旅に出てマーレーヌ変わつたマロね

そつと咳いた。あたしひびくつして、振り返り聞いてみた。

「え？ 何で？」

「だつて、少しの間で成長した感じがするマロ。ものの考え方も、魔力も、魔歌も、顔つきも。迷いがなくなつてきて、強くなつた感じがするマロ。」

魔歌もお城にいた頃とコンテストでは違つ感じがしたマロ。音程も安定してたし、声が伸びやかになつたんじゃないマロ？？顔つきだつて、しつかり前見てる感じマロ。昔はなぜか、どこか俯いて無理して、心がぱあつとしきれてなかつたマロ…」

マーロンが淡々と言った。

自分で変わつたなと思つていたけど、マーロンに言われてしきり時間した。

そしてマーロンは、こんなにもあたしのことを見つけてくれたんだ。しかも、旅をする前から。きっとお供として仕えたときから、ずっと見つけてくれたんだと、マーロンの話を聞いて思つた。

「マーロン、ありがと。あたしもこの旅に出て良かったと思つた。」

！」

笑顔で言つたら、マーロンは照れた様に帽子を深く被りなおした。ちょつと頬を赤く染めて。いつこいつ姿は可愛いのよね～。

「ナウマロね。水の王国でも頑張るマロよ。オイラもが…」

”ペロロロロノ”

マーロンが喋つてゐる途中、マイコンが鳴つた。

「あうマロ…」

マーロンは悲痛の声を上げた。あたしは軽く苦笑してマイコンを開いた。風の王国からだ。

『マーレース様、マーロン様

おめでとうございます！無事に到着も出来たようですが、御両親を始め、メイド、家来一同、喜んでおります！

水の王国でのご活躍を期待しております。

最近は王妃様の体調も優れており、落ち着いた日々を過ごしております。

ここで悲しいお知らせが、モダン先輩が学習院に戻つて、再度お勉強することになりました。私どもも承知していたのですが、秘密にしてほしいと言われ、このような形でお伝えします。

3年間、勉強した上で、戻つてこられるのです。再開するのが待ち遠しいですね！！

戻つてこられたときに全ての勉強を見ると張り切つておられました。

最後になりましたが、マレーヌ様、マーロン様、お2人の健闘を祈っています。ファイトです！

リア

「リアからだ！モダン、何も言ってくれなかつたから…。マーロンは知つてた？」

「メールと一緒に見ていたマーロンに尋ねてみた。
「オイラも始めて知つたマロ。まあ、教え子がいないんだし、3年間だけマロよ」

マーロンも知らなかつたんだ。マーロンの言つとおりだし、モダンは氣まぐれな人だつたしね！少し寂しいけど、3年間だけよね！
そう思つとあまり悲しくなかつた。

”ピロロロン”

30分程経つてから、もう1通メールが来た。

『マレーヌ、マーロンへ

無事に到着してあたしもフィリーも安心しました！大変みたいだけど、頑張つて！！

サラサは何度も会つた事があるけど、とってもいい人よ…！
琴が上手だつたはず。最近はハープも始めたつて聞いたわ。デュオとかしちゃえれば（笑）

いい結果を楽しみにしてるわー！

丁度、パレードの件について情報収集していたところよー入った情報を報告するわね！！

何人かが黒いローブの女性から香水を貰つたらしいわ。
匂いを嗅いだら、怒り、悲しみ、恐怖などを感じて、あまり良くない状況になつたみたい。

ローブの女性の素顔はあまり分からなかつたみたい。

虚うな漆黒の瞳をしていて、見た途端寒気がしたらしいわ。

特徴的なのが、額の真ん中に横一直線、傷があつたつて。
傷から何とも言えない威圧的なオーラが出ていたらしい。

少ない情報だから、まだまだ調べてみるわー何か嫌な予感がする
けど、お互い頑張りましょ！
んじや、バイバイ！…』

漆黒の瞳に額の傷。あたしは顔をあまりよく見てないけど、血色の悪い肌で、瞳と同じ漆黒の髪をしていた。ほんと、嫌な予感がしてならない。リリーのメールを見た後、なかなか言葉が出てこなかつた。

あたしは何も言わずにマイコンを閉じた。マイコンから反射する光を見ていると、胸騒ぎがした。椅子から立ち上がり、窓の前に立つた。窓の外は湖が広がる。色鮮やかな魚が集団で泳いでいる。澄んだ「バルトブルー」を見ていると、少しづつ落ち着きを取り戻すことが出来た。

「マーロン、どう思う？ 黒いローブの女性のこと…」

窓に手を当てて、その冷たさを感じる。マーロンと顔を合わせることが出来ず、水中を眺めながら聞いた。怖くてこうしていないと、声が出せない。

「危なこ感じがするマロ。放つておけなこナビ、ビリシナリシでかいマロね」

マーロンはため息交じりの声で答える。

“ビリシナリシでかいな” そのまま業で自分の無力さを窺ふだ。へるっと、マーロンのまつを回り、

「ソレで立ち止まつても駄目よーーーあたし遙に出来ることをやつましーーー

強く言こ張つた。驚こいて後ずさるマーロン。

「出来ることつて何をするマロ?」

「えーっと……」

マーロンが陥じこ顔で、

「何も考えてないマロね?..」

あたしを見る。焦りながりも、

「あーーじこやさんに資料を頼んだでしょ? マリアにつけて調べま

じょよー何かヒントが得られるかも。図書室へ直行ーーー!」

ぱつと思こ出す。即行動があたしのモード。マーロンを引っ張つて図書室へ向かった。

第3話 メールで…（後書き）

どうでしたか？？

なんとも言えませんね？？アハハ

とにかく…！たくさん更新するので、

これから水の章をたっぷり楽しんでください！

最後まで読んでいただきありがとうございました♪

第4話 マコア・スマーリーを懲らしつけ（記録モード）

何も無いとはないかもです ｗｗ

「おひくつじいひ」

第4話 マリア・ペラーハを調べてみよう

地下4階 図書室

「へえ～結構広いんだあ。図書室なんて久しぶりに来ちゃつた～～」「つてゆうか、マーレーヌが本読んでる姿見たことないマロ」

「失礼ねえ！あたしだつて読んだるわよ。『ストロベリーパロ』」

「それは雑誌マロ。文字がびっしり入った活字の本、読んだことあるマロか？？」

マーロンがズバリとこう顔をあたしに向ける。ちなみにストロベリーパロとはファッショングループとは別に。じいやさん居るから急いで！」

話を逸らし、じいやさんの元へ急ぐ。じいやさんは分厚い本をテープルにたくさん重ね並べていた。あたしの中指くらいの分厚さだ！こんな本を読めつて言つの…？読む前から頭痛が～。

「おお。マーレーヌ様、マーロン君。丁度、呼びに行こうと思つていたところじゃや～」

「良かったです。これ…全部読めばいいんですか？」

「もうじや。しかし、わしが探したのはこれだけなんじや。すまんのう」

じこやさんが謝る。嫌々、謝らなくて…これだけあれば充分過ぎますから～～

「かなり分厚いマロね。マーレーヌの集中力でどれだけ読めるマロか

…」

マーロンめー言つたことなどにかく言つんだからー後でこいつしめてやるわ。

「まあ、じつくり読めばいいわい。本は片付けずそのまま置いてもよこはすじや。では、わしは仕事に戻りますの」

「あつがとうござります。時間もとつてもらつて…」

「いいんじゅよ。こんな老いぼれが役に立て嬉しいぞ」「じいやさんはそう言い残し、図書室から出て行った。

「さあ、手分けして読むマロ」

「じゃあ、あたしこれ〜」

あたしが手にしたのは『世界を支えた偉人たち』という、中でも薄めの本。

「薄い本を選んだマロね。まあ、最初は慣れマロ。がんばって読むマロ〜」

マーロンが選んだ本を見るなり、皮肉混じりに言った。ムツときたけど、聞こえないフリをして、マリア・ピアーノのページを開く。マリアのプロフィールに、生まれてから亡くなるまでの出来事。初めてのページにはマリアの挿絵が載っていた。実際の顔は分からないけど、可愛いのよね。

腰まで伸びる金髪を靡かせて、苦しむ人々に魔歌を聞かせる。そして、何も言わずに去っていく。と言つのがあたしのイメージ。

とにかく、読みましょうか。

～マリア・ピアーノ

風の王国の血筋。127代目の王の次男がマリアの父にあたる。王位継承はしていない。

風の王国の情報大臣の父の元、不自由なく生活をしていた。マリアは末っ子であり、姉が2人、兄が1人がいた。

幼少の頃より、魔術の訓練を受ける。素直で穏やかな心の持ち主だったといわれる。そしてその頃から、強大な魔力を身につけていた。

学校には通わず、王家直属の家庭教師から教育を受ける。成績は優秀。好奇心から多くのことを学び、記憶力に長けていた。

12歳の頃、魔歌に興味を持つ。その頃には大抵の知識を身につけ、魔術を操ることもできた。歌に魔力を混ぜ込ませるという、現代でも高度な魔術である魔歌。その魔歌を数年の歳月を経て、強大な魔力と共に身につけた。

魔歌の練習を行っていた15歳の頃。思いもしない事が世界で起こった。大不幸の年とも言われた年に起こった悲劇の戦。4年間も続き、多くの民の命を奪つた、魔術大戦争。大不幸の年に起きた、伝染病の流行、大災害、権力争い、民の不満から悪循環を生み戦争になつたのである。そして、権力を持った国が小国を支配し、土地がなくなると、他の国とぶつかり合い、大勢の命を奪つるものまで発展した。

マリアは王家のものとして、家族と共に安全な地で終戦するのを待つた。その間もマリアは魔歌の練習に励み、希望を捨てなかつた。戦争の反対者で、終戦を訴え続けたと言つ。

そして4年間の激闘の末、魔術大戦争は終戦。各地は焼け野原と化し、幾多の命が亡きものとなつた。生存者も心身ともに深い傷を負つたのだ。復興を始めるものの、順調に進まなかつた。

月日は過ぎ、新たな1年を迎えたある日。20歳となり、大人の仲間入りを果たしたマリア。魔歌を我が物とし、人々に希望を与える為、マリアは世界各地をまわる旅に出た。

ここまでが、マリアが旅に出るまで。あまり知らなかつたことばかりで勉強になつた。でも、これといった情報はない。きっと、旅に出でから何かあるに違いない。

～マリアの旅は困難の連続であった。世界を渡り歩くのはかなりの時間を費やし、小さな村から大きな街までも旅をした。それに、簡単に受け入れてもらえず、交渉を重ね、魔歌で人々を癒した。国の中南部には「伝説の魔歌を納め、人々にあがめられた。

旅をしている間、マリアの魔力はどんどん強くなつていったという。魔術を使つても疲労が出ず、最高ランクの魔術や、王家の者でないと使えない、風以外の属性魔術を使えるようになつっていた。

素晴らしい成長を遂げ、地上の国を旅し終えたマリアは、空の王国にも身を乗り出した。戦争被害の薄かつた空の王国は、文明が遙かに進んでおり、マリアの興味を引くものばかりであった。

そして、マリアは空の王国から幻の大地へ行くと決意した。幻の大地には光と闇の王国があり、そこが世界の原点だと言う説がある。その原点への行き方を発見した空の王国だが、未知の領域へ踏み込もうとする者は誰一人として居なかつた。

決意したときのマリアは20代とまだ若く、幻の大地へ行くことを誰もが反対した。しかし、マリアは自分の理念を貫き通し、ついに幻の大地へと旅立つた。

マリアは幻の大地へ旅立つて、ひと月ほどすると何の前触れもなく、戻ってきたのだ。しかも原因不明の病にかかっていた。目は虚ろで、会話もままならない。寝たきりの生活で、3日目を迎えた朝、マリアは最後の息を吐き終えた。

こうして、世界最強の魔術師マリアは、『美風の歌姫』と呼ばれ、人々の胸に残つてゐる～

”パタン”

「ふう～、つっかれた～」

ぐつと背伸びする。体全身が麻痺したみたい。目もショボショボする。たつた数ページだけど、小さな文字を読んでいると疲れてしま

ました。

「やつと終わったマロか？マレーヌにしては読んだほつマロかね～」
マーロンに突っ込まれたが、何かを言い返す元気さえ無くなつて
いた。それにこればかりは言い返せない。普段、本を読まないあ
たしがこれだけ読めば、すごいことよ。…たぶん。

「たいした情報はなかつたよ～。知らないこともあつたけど、知つ
てることばかり」

「こつちもマロ。どれもこれも変わらないマロよ」

「そつか。でもまだまだこれからよね～」

「氣合いを入れて、もう一度文字と戦うのであつた。

「起きてください…。申し訳ありません。利用時間が6時半までと
なつておつます。借りる本があつたら急速に」
頭の上で係員さんの声がする。本を読みながら。うとうとしてい
たので、ハッと我に返つた。室内の時計を見ると、6時半をきりきり。
「ごめんなさい！マーロン、本借りる？」
慌てるあたし。マーロンは本を綺麗に並べて、
「借りないマロ。ここに置いたままでいいマロか？」
「構いませんよ」

あたしたちは係員の返事を聞き、急ぎ足で図書室を出た。

「いつの間にか、時間が経つてたみたいマロね～」

「本当！あたし、ちょっと寝てた…」

廊下を歩きながら話す。集中して読んでなかつたから、本の内容
があまり思い出せない。でも、思い出せないぐらいだから、内容に
変わりは無いのだろう。結局あたしは寝ていた…。

「道のりは長いマロね」

マーロンがため息交じりに咳いた。あたしは呻いて、重い足で階

段を昇つた。

第4話 マリア・ペトローナを翻案しよう（後書き）

どうでしたでしょうか？

今回までは水の章の前編… そおんなことはない…。

この4話で、マリア・ペトローナについて少しでも分かつて頂けた
ありがとうございます！

そして、次話！！

物語がついて…

あわわ。これ以上言つたら駄目ですね（言つてみるとひなもんですか？）

最後まで読んでいただきありがとうございましたペコ

これからもよろしくお願ひます。アペルペル

第5話 姫と執事（前書き）

第5話、更新ですーーーやつと『』がどうだいっつたあーーー。

姫と執事って誰のいるじょつか…??

ごめんなさい

「ふー、気持ちよかつた~」

何が気持ち良かつたって？お風呂から上がったんで…す…水の城には大浴場があつて、毎日開放されている。水の城にきて2日目から、毎日大浴場に入つている。大浴場のお湯はやわらかくて、肌に優しく、体にとつてもいい。ここ数日でお肌がスベスベになつた気がする。体の疲れもすつきり取れちゃう。

ここ4日間、図書室で本を読むか、街をふらつくかのどちらかだつた。圧倒的に図書室に居る時間の方が多い。あたしの場合、マリア関連の本から、興味のある本に移り変わってばかりで、ショッちゅうマーロンに注意されていた。全く読んでないわけじゃないのよ？？それに、マーロンの集中力さえ切れかけてきたし…。それでも、今日は全ての本を読み終えた。その後、マーロンと話をした。

「今まで読んだ中で気になる所はあつたマロ？」

「気になる所も何も、どれも同じ内容だつたもん」

「そうマロよね…。オイラはやつぱり、幻の大地に行つて帰つてきた所、つまり幻の大地に行つている間が気になるマロ」

マーロンは一呼吸置いて、

「きっと、幻の大地に行つてから何かあつたはずマロ。それに…」
次は声を潜めて、

「不死鳥がマレーヌに言つた事、マリア様は生きているって
不死鳥ははつきりそう言つた。しかし、マリアは幻の大地から帰つてきて、原因不明の病で亡くなつたと、どの本にも書いてあつた。
「じゃあ、そのことについて詳しく調べないとね」
「マロー！幻の大地についてかいてる本を調べるマロー…」

「こんな感じ。幻の大地について調べるのは明日から。さすがに今日は読みきつたのでもういいだろ？、ところどころになつたのだ。

「マーレーヌ、遅かったマロね」

風呂上りでゆでだこ状態のマーロンがそこにいた。

「そつかなあ、いつもよりすこし長かつたかも」

濡れた髪を乾かしながら答えた。あたしの腰まである長い髪はなかなか乾かない。ドライヤーで乾かしたつもりなんだけどなあ。乾かすのについつい時間が掛かってしまったのかも。

「まついいわ。部屋にもどりましょ～」

自分の部屋を目指して、階段を下つていぐ。そして地下3階に着き、廊下を突つ切つて自分の部屋に向かう。そのとき、

「ウォーテル、ウォーテル……？」

あたしの部屋のもう一つ次の角からサラサの声がした。弱々しくウォーテルさんの名前を読んでいい。何かあつたのかな？気になつて、自分の部屋のある角をそのまま進み、声のした角から顔を出してみる。

サラサはウォーテルさんの部屋の前に経つている。でも、サラサの部屋の前とも言える。しかーし、ウォーテルさんの部屋のほうを向いてるんだ。深刻な表情のサラサに声を掛けられずにいた。何なんですか！？この、家政婦は見た！的な状況……。

”ガチヤ”

キタ――――――――――

あたしはドアの音に心の中で叫んだ。

「…どうされました、姫？」

出てきたのはもちろん執事兼ボディーガードのウォーテルさん。黒いスーツにサングラス。いつもの格好をして、サラサを不思議そうに見つめている。

「ウォーテル、そんなに警戒なさらないで。今は会議中で誰もいませんわ」

警戒心を解くよつにそつと言った。どうしたんだろ、このサラサの意味深な発言。ま、まさか！？

ウォー・テルさんは短く刈り込んだ頭をガリガリと搔き、部屋から1歩出た。いつものような冷静な態度。サラサは…。

「ウォー・テル！！」

名前を呼んで、サラサは抱きついた。驚いて声を上げそうになつたが、自分で自分の口を押さえた。まさか、本当にあたしの考えが当たるなんて。抱きつぐ、それが意味するのは…？

ウォー・テルさんは少し驚くものの静かにサングラスを外した。きりりとした瞳。誰かに似てる？？そして、右手でサラサの頭を優しく撫で、左手でサラサの背中をゆっくりとする。まるで、声を押し殺して泣くサラサを慰めるように…。

「ひめんなさい、ウォー・テル。じつして話すのは久しぶりだから…」

サラサは涙と嗚咽は止まつたが、声を詰まらせている。

「サラサ、俺とお前は姫と執事なんだ。赤の他人であつてお前が思つてるような関係じゃない」

ウォー・テルさんは尚も抱きしめるサラサに、

「俺はお前のお兄さんじゃないんだよ、サラサ」

そうそう、2人はそういう関係になつたら駄目なんだよ。

…つてお兄さん…？

「うそ！それならどうして、私を名前で呼んだの？いつもなら、姫つて呼ぶじゃない」「わたくし取り乱すサラサ。

ちょ、ちょっと待つて！あたしはすぐ勘違いしていたようだ。は、恥ずかしい…。でも、この会話から2人が兄妹だつてことが分かつた。それもそれで信じられない！－だつて、ウォーテルさんが言つたとおり、2人は姫と執事で赤の他人じやないの！？

「ウォーテルはれつきとした私のお兄様よ！」

腕の中で叫ぶサラサに、ウォーテルさんは驚いた。そして、サラサを自分の体から離し、

「わかつた。兄妹だつてことは認める。

だが、俺は魔力を持たずに王家に生まれてきた。魔力のない俺はここに…王家には必要ないんだ。でも、執事としてサラサと赤の他人だつたら必要とされる。分かるか？俺たちは…今は兄妹じやない！これからだつてそうだ」

声を震わせながらも、また泣き出しそうなサラサに冷たく言い放つた。その横顔はサラサのお父さんに似てる。

「それでも、私とウォーテルは兄妹ですわ。…お父様達は知つているんでしょう？」

「ああ。しかし、それを知つてどうするんだ？」

なんとなく予想がついているウォーテルさんに、サラサはきつぱり告げた。

「お父様達に認めさせるんです。ウォーテルは、お兄様は、あなたの子供だつて。魔力は持つてなくとも、王家をの血筋を引いているつて！」

サラサは本気だ。決心のついたあの目を見れば、誰だつて分かる。「そんなことしたつて無駄だ。王様達は忙しい。それに…。いや、いつ話したつて同じこと。しおうがないんだ、分かつてくれ」

ウォーテルさんは力なく言つ。ウォーテルさんは何言い掛けたのだろう？

「そんなのあんまりだわ！」

わつとサラサはまた泣き出してしまつた。今度はウォーテルさん

がサラサを抱きしめる。そつとサラサの頭を自分の胸にしづめさせて…。

「サラサ、俺とお前は兄妹だが、姫と執事っていう関係なんだ。俺が兄でなく、執事という立場だからサラサの傍でいられるんだ。俺はそれだけで幸せなんだよ？」

穏やかな口調。言われる訳じゃないけど、あたしまで泣きそう。「俺も兄妹でいたいと思つ。でも、仕方ないんだ。だから、しまつておこう。兄妹つてことは心の奥にしまつておこう」

そして、サラサをぎゅっと力強く抱き締める。サラサは小声で何かを言う。ウオーテルさんはそれに静かに頷く。

サラサは手で顔を覆い隠し、部屋に戻つた。ウオーテルさんは口をきゅと結び、サラサの部屋のドアを愛おしそうに見つめる。目を伏せると、静かに部屋に入りドアを閉めた。“パタン”という音に心が締め付けられた。

あたしは無言のまま、暗い気持ちで部屋に戻つた。罪悪感とやりきれない気持ちで胸が押しつぶされそう。

「マーロン、この状況…理解できる？」

ベッドに腰を下ろし、重い口を開けた。一言言つだけでも精一杯。

「聞いてはいけないものを聞いてしまつたマロ」

マーロンも混乱しているみたいだ。でも、この状況を整理しておかないと。

「ほ、本当にあの2人は血のつながつた…兄妹なのね？」

兄妹という言葉にどうしても、抵抗を持つてしまう。

「ウオーテルさんまで認めてたから…。でも、ウオーテルさんは王家人として認めてもらえたみたいマロね」

「ねえ、どうして魔力がなかつたら王家として認めてもらえないのか？」

「…」

「きっと魔力は王国の強さの象徴なんだマロ。魔力が強いほど、権

力が強いとされるマロ。魔力がない王だと、弱いとみなされ、その国をまとめあげる事が出来ないと考えたマロ。きっと

じゃあ、あたしに魔力がなかったら、あんなに楽しい生活を送ることなど出来なかつたのか…。そつ弾うとぞつとする。でもそれを、ウォーテルさんは強いられている。

「話を戻すけど、サラサは兄妹でいたくて、ウォーテルさんは今の関係で幸せなんだよね」

「どちらの気持ちも分からぬでないマロ。姫として王家の裕福な暮らしをして、実の兄は執事として仕えている。サラサ様は自分だけいい思いをしているのが嫌マロね」

あたしもそう思う。マーロンはさうして深刻な表情で、

「でも、ウォーテルさんは、執事の立場でいないと、サラサ様の傍にいられないみたいマロ。執事だとしても、それだけで…満足してるマロね」

と言つた。あたしは1つ付け加えた。

「だけど、ウォーテルさんだって兄妹でいたいと思つてるんでしょ…！？」

これは絶対に間違つていなければ。だって、ウォーテルさんのあの寂しい瞳を見れば…。

「これから、あの2人どうなるのー？」

モヤモヤした気持ちのまま、誰にも悟られないうち、いつの間にか『姫と執事』の関係で過ごすなんてあんまりだ…。

「あ、あたしサラサ達と話していくーーー！」

拳を強く握つてベッドから立ち上がつた。しかし、

「ダメマローー！」

マーロンに反対された。顔をしかめると、

「サラサ様はまだどうしていいか分からぬでマロ。そんな所に行つても、かえつて混乱させるだけマロー！今はそつとしておくマロ

…」

声を小さくしながら、マーロンは訴えた。

「でも……」

「マーレースだつて混乱してゐるマロ。ちやんと寝て、明日あさごど心の整理をして、話してみるマロ。分かったマロ?」

マーロンがあたしの目をしっかりと捉える。彼を見ていると、何も返す言葉が出てこなかつた。あたしはため息をついて、力なく微笑んだ。

「お望みどおり、眠つてあげる。マーロン、おやすみ」
マーロンはあたしの素早い行動に驚いたようだ。いっせんなら、反抗するから。

「お、おやすみマロ」

言葉を詰まらせながら言つた。あたしは滑り込むよつてベッドに潜り込んだ。顔を出して、

「1人で寝てよねー」

ウインクもおまけして、布団の中に顔も隠した。そして、布団の中で体をこれでもかといつほどに丸める。

泣きたい感情を押し込むよつて。あたしが泣いたつて何の解決にもならない。泣きたいのサラサとウォーテルさん。

すぐにパチンと電気を消す音がした。続いて、スイーツと音が通り過ぎた。マーロンだ。

きつと泣き出しそうなことに気付いたはず。あたしは嘘をついたり、誤魔化すのが下手。特にこの手のことは。マーロンに「おやすみ」と言つたところから、分かっていただろう。それでも彼はあたしをそつとしてくれた。彼の優しさを痛いほど感じた。

サラサとウォーテルさんがかわいそう。やすやすと眠る眞になれない。

サラサも、ウォーテルさんも、兄妹として生きていきたいはずなのに。細かい事情は知らない。それでも、幼い頃から兄妹という関係でいられなかつたはず。

なのに、我慢して我慢して毅然と振舞つている。誰一人として、あの2人を兄妹だとは思わないだろう。水の王国の可憐な姫と忠実に仕える執事。人々の目にはそうとしか映つていない。

誰にも悟られないように、サラサとウォーテルさんは『兄妹』といふ真実を、『姫と執事』といふ仮面で隠している。兄妹でいたいという気持ちを心の奥にしまつてゐる。

抑えきれないはずなのに、溢れてしまいそうはずなのに、心の中に沈めている。

そんなサラサとウォーテルさんの悲しそうマーロンの優しさに胸を打たれた。

でも、涙は流さない。あたしは強くなつてみんなを救うつて決めたから。みんなを支えるつて決めたから。

第5話 姫と執事（後書き）

サラサとウォーテルさん

姫と執事

妹と兄

悲しい事実です。

マレーヌもそんな2人に心を痛めているようで。。。

「の、た、たした中、何が起、いるの、じょ、つか！？」

最後まで読んでいただきありがとうございました♪

感想＆辛口コメ＆描き下ろし＆ペコリ

題6 話 亂朝（前書き）

更新がたいぶ遅れてしましました。本当にすみません（汗）

学生ついでにいろいろお話しですね）））））

じつはりゆうくつ

いつの間にか眠っていたあたし。マーロンに体を揺さぶられて目が覚めた。身支度をして、朝食を食べに1階へ向かった。

朝食もバイキングだから、適当に食べ物を取り分ける。そして、窓の外を眺めて食事をする1人の少女の下へと足を速めた。

「サー・ラサ、おはよ」

腰をかがめて、元気よく挨拶をした。うつろな目も、瞬時に輝きを取り戻す。

「マーレーヌ、マーロン、おはようですわ」

明るく振舞っている。あたしはすぐにはじ取った。マーロンも挨拶を返す。続けてあたしが、

「隣座つていい?」

笑顔で聞くと、サラサも笑顔で答えた。でも、どこか笑つていないよつの気がした。

「今日は王様達と一緒にないんだ?」

いつもなら、王様や王妃様たちと中央のテーブルで食べている。しかし、今日は1人のサラサだった。

「父上と母上は昨日の会議でお疲れになつたらしいの。だから今日は、個々でお食事をするのですつて」

サラサが緑茶をすすつた。あたしはパンをほつぱりぱがら頷いた。

「大変マロね。会議でどんな話をしたか知つてらっしゃるマロ?「少しなら…。土の国との対談について、議論したそうですね。いろいろ話すことがあるみたいで。土の国とも和解しなくちゃいけませんからね。でも、まだ決定していないそうですわ」

サラダを一寧に食べながら、サラサが説明する。そういう会議だったんだ。どおりで昨日の夜、あたし達しかあの階にいなかつたわけだ。

「なんといつても、土の国は科学者ばかりで、他国の力を借りずに自分達でやつていけると言い張つてゐるそ�で。他国との交渉や取引、対談には応じない事で有名なんですね。だから、そんなことをしても、無駄だと言う意見が半数あるんですつて」

「なかなか進んでいないみたいマロね」

「そなんですわ。だから、また今日も会議らしくて、大変そうですわ」

2人が難しそうに話をする。他国との付き合いつて難しいのね。特に、小国との付き合いが難しいって勉強したよ。

「まつ、あたし達はその結果を待つだけだし。気長に待つてしまよー！」

もう難しくて、込み入つた話はおしまい。サラサに元気になつてもらひつ為に來たんだから。もつと楽しい会話をしなくちや！

「ところでサラサは、いつも何やつてるの？」

水の王国に來たものの、図書室にこもりつきりで、サラサがどんなことをしているのか気になつた。

「私は、そうですわね…。お勉強やレッスンかしら~。もちろん自由な時間もたつぱりあつてよ」

「レッスンつてどんなことやつてるの？あたしは魔歌ばっかりだつたな、アハハ」

魔歌ばっかりと言つより、魔歌以外やる気がなかつたからね~。

魔歌以外は、ピアノとか社交ダンス、手芸に料理とか？どれも退屈で、そのことを周囲は知つてゐるので、レッスンは魔歌中心となつていた。

「ええと、お琴、舞踊、茶道に書道などかしら。」

サラサは指折り数えて、楽しそう。

「ハープも始めたつた聞いたけど？？」

「ええ、そうなの！ いつか、豊水のハープを弾けるよつこと、レッスンを始めたんですね」

「豊水のハープ？？」

あたしとマーロンの声がはもつた。

「うふふ。豊水のハープは枯れた地に恵みの水を湧き上がらせる、素晴らしいハープなの。それを弾けるのは極わずか。だから、弾けるように頑張ってるんですね！！」

サラサが意気込む。

「まあ、どの魔歌も楽しくってよ」

「ふーん、レッスンが楽しい。あたしは魔歌以外、退屈で退屈で…」

苦笑い気味に言った。それを聞いたマーロンが、

「ほんとマロ！ マーレーヌときたら、レッスン前は駄々こねたり、脱走したり…。レッスン中もあくび連発、ブーブー文句言って、先生方も呆れてるマロ」

とあたしのレッスン中の態度についてべらべら話す。サラサはあらうと、少し驚いている。

「うう。でも、魔歌のレッスンは頑張ってるもん！」

あたしは負けじと言い返す。しかし、

「魔歌のレッスンだけマロね」

マーロンに痛いところを突かれた。その光景を見たサラサが優しくこう言つてくれた。

「ふふ、1つだけでも夢中になれることがあればいいと思いませんわ

「だよね、だよね！ あたし、魔歌上手になりたいもん！」

嬉しくつて、ついつい目を輝かせた。でも、

「他のこともしつかり出来たら、もつといいと思いますわ」と言われてしまった。そのとおりなんですけどね…。

「ねえサラサ、あたしサラサのレッスン見たいな

「冗談で言つてみた。

「構いませんわよ？ 今日は昼食後にお琴のレッスンがありますわ

「やつたー！」

つて、んん？？

「ええ、本当にいいの？『冗談で言つたのに…』」

「いいのよ？マレーヌがレッスンを好きになつてもうかるきつかけを作れるんですもの」

「冗談だつたけど、サラサが頼もしく言つてくれたから、見学しちゃお！」

「レッスンは1時半からですから、10分前にお部屋に呼びに行きますわ。そつだわ、レッスンだけじゃなくて、お勉強も見ない？あ、一緒にやればいいですわ！」

「い、いや…」

「いい提案マローマレーヌは、レッスンより勉強の方が出来てないマロから。うんうん、そして下さいマロ…」

サラサの提案にマーロンはすっかりその気。勉強なんて、レッスンより嫌…！」

「えつと、まだ調べることがあるから～。レッスンだけでいいかな

」

「そんなことな…ふがつ…？」

口を滑らしそうなマーロン。また余計な事を言つそうだったので、慌てて口を押さえてあげた。

「あはははー！10分前に部屋に呼びに来てくれるのよねー？」

冷や汗たらたらのあたし。半信半疑だが、優しい表情のサラサ。分かつてくれたみたい。

だが、その顔は一瞬にして青ざめて、悲しい表情へと化した。表情の変化に、サラサの視線を追つ。楽しそうに会話をしながら食事をするメイド、きびきび食事をする家来、食べ物を選んでいく人の列。その間をぬつて、こちらに近づいてくる人影。

「ウォーテル…」

サラサの執事であり、唯一無二の兄である、ウォーテルさん。昨

田の口論から、サラサは立ち直つていないみたい。ふるふると小刻みに体を震わせている。ウォーテルさんは…どうなのだろ？

「姫、もうすぐお勉強の時間になります」

いつもの冷静な態度。サングラスに隠れている瞳。昨日は寂しくて悲しい瞳をしていた。今どんなことを思い、妹の前に立つているのか。

「…コテツは？」

「ああ、そういえば、コテツが2人に話があるつて言つてました。コテツは私の部屋で待つていますわ。じゃあ、お勉強の時間だから

…」

名残惜しそうに、スッと立ち上がる。食器の並んだトレーを取ろうとすると、ウォーテルさんが、

「自分がお持ちします。行きましょう。マレーク姫、マーロン君失礼しました」

トレーを持って、サラサの後に続く。ビートなく寂しそうな背中に見えた。ウォーテルさんもサラサも。

「マーネ、大丈夫マロよ」

マーロンがあたしの様子に気付いて声を掛けた。

「うん、ありがと」

「それでも、コテツチは何の話があるマロか？」

「そうねえ、コテツチじやなくてコテツ君」

マーロンはコテツ君とこの間にか仲良くなつていていた。だから、コテツ君をコテツチと呼んでいる。

「と、とりあえず、部屋に戻つてからね」

コトリチと呼んでしまつたあたしに、マーロンがこわいと笑つてきたので慌てて言つた。

「コテツ君はあたしたちに何を話す気だらう？」

どうでしたか？

次回もお楽しみに 更新率上げられないよう頑張ります。

最後まで読んでいただきありがとうございました。お忙しいところ

第7話 心配のあまり（漫畫セ

セセセセ

更新率全然上がりなくって、本当にすみませんー。

頑張りますので… ^ ^

ごめんなさい

「コテツ君、いる? マーネスよ。マーロンもいるわ」

朝食を済ませ、部屋に戻つてそのまま、コテツ君の元へ来た。サラサのお供コテツ君に呼ばれて、訪ねることになった。

”ガチャ”

「お待ちしていました。どうぞ、入ってください」

つるつるした白い体が姿を現した。すぐさまコテツ君の部屋に案内してくれた。

部屋はサラサの部屋でもあり、淡い水色を基調とした家具が並んでいた。整理整頓され、清楚で清潔なイメージ。部屋は2つに区切られており、カーテンで仕切られた奥は寝室。入つてすぐのこの部屋は、テレビを見たり、何かを書いたりするところみたい。

寝室とは反対側の横長のドアに案内された。コテツの部屋と書かれた札が掛けられている。コテツ君専用の部屋らしい。

サラサ、優しすぎる! あたしなんか、ポストみたいな部屋なんだけど…。こんなに差があつていいのか! ? と内心思い、マーロンをちらりと見る。マーロンは啞然とし、口を『お』の字にしてくる。風の城に戻つたら、ちゃんとした部屋にしてあげよお…。

コテツ君は低い位置につけられたドアノブを、ヒレで器用に開けて中に入れてくれた。入り口のドアにも、低い位置にドアノブがあった。コテツ君のためのドアノブだったんだ。

8畳くらいの小さな部屋。天井を見上げると、大きな水槽が部屋の奥まで続いている。小さな階段を上ると、水槽に入ることがで

きるみたい。水槽の前に犬用のクッショーン。これはコテツ君のベッドだらう。左側の壁には、ミニ冷蔵庫とタンス。右側には、本棚が並んでいる。入った手前の右隅には、高々とテレビが飾られている。アザラシにしてはなんと、贅沢な部屋なの！？コテツ君の背丈から考えて、テレビ以外は小さな家具が使われている。動物園のアザラシが見たら、なんと言つだらう？太陽ががんがん当たつた外に放り出されてるんだぞ！

コテツ君が貝殻の形をしたクッショーンを取り出して、座るよう促してくれた。ふかふかのクッショーンにあたしたちは座ると、コテツ君が目の前で止まつた。座つたと言う方が、正しいはずだ。

「マーレーヌ様、マロッチ、来ていただきてありがとうございます
ペコッと全身でお辞儀をする。

「サラサ様から聞いたけど、話つて何マロか？」

マーロンが率直に聞いた。すると、コテツ君は瞳を濁らせて、話しが始めた。

「昨夜、サラサ様とウォーテルさんのお話、聞いてらつしゃいまし
たよね……？」

「……やつぱり。

「……ごめんなさい。盗み聞きする気はなかつたの。サラサの様子
がおかしかつたから、気になつちやつて……」

あたしは正直に認め、謝つた。

「いいんです。仕方ありませんよ。サラサ様は本当に気が動転してい
ましたし、マーレーヌ様は優しいお方つて……あつ」

「コテツ君がそこで言葉を切らせた。なぜか、気付いたように言葉
をつぐむのであつた。その先も言つてよかつたのに。

「コテツチ、昨日はどこにいたマロ？」

あたしも気になつてたこと！

「部屋の中です。僕もサラサ様の様子がおかしいと思つて。2人は
口論で氣づかなかつたみたいだけど、僕は部屋の中からお2人が見
えちゃつたんで」

「そうだったんだ。あの、コテツ君はいつから知つてたの？2人が兄妹だつて事…」

どうしても、『兄妹』って言葉にどもつてしまつ。

「それは、僕がサラサ様のお供になつてすぐ聞かされました。

国民に王子は、ウォーテルさんはサラサ様の生誕一ヶ月で病死したと…」

「そんな、ひどい！」

拳をぐつと握り締める。

「ウォーテルさんは、ある家に養子として引き取られ、静かに暮らしていたそうです。自分が王家の者だと知つて。

あるとき、執事になると黙つて家を飛び出し、執事育成学校に通い始めた。成績優秀で学校側から、学費が支払われ、ここまできたと。卒業後はすぐに水の王国の執事として採用されたそうです。16歳と若いながらも、その優秀さで採用された。王様方は、初めは気付かなかつたけど、やはり気付いてしまつたそうです。

コテツ君は静かにため息をつき、続けた。

「辞めさせられそうになつたのですが、条件付きならばと…」

「条件？」　「条件マロ？」

あたしとマーロンが声をそろえる。

「けつして、サラサ様と周囲の人たちにばれてはいけない。1人でも気付かれたら、国外追放、サラサ様にもつ度と会わないという条件です。そして、見張り役を兼ねて、僕がお供として配属したんです」

「コテツ君の声は重く暗い。あたしは声を出すことが出来なかつた。サラサとウォーテルさんだけでなく、コテツ君もつらい思いをしている。

「兄弟だと知つてるのは、王様と王妃様、ウォーテルさん自身、じいやさん、僕。後、あなたたち2人です。そして、サラサ様まで

涙をボロボロ流しながら、

…」

「どうか…」このことは内密に…」

体を寄せて訴えた。口テツ君はサラサたちを引き離したくないのだ。

「当たり前じゃない…！ 2人を引き離すなんて絶対ダメ！ ねえ、サラサはいつ知ったの…？」

『2人が兄妹だということ』この言葉は続けられなかつた。口

テツ君は少し考え、「どうやって知ったのかは分かりませんが、1年前くらいです。何の前触れもなく、僕に聞いてこられました。自分達は兄妹なのか、と。

驚きました。それまで何も知らずに過ぎ」してきましたはずなのに。どうやつて知ったのかも、教えてくれませんでした。ウォーテルさんも知つているのかは分からなかつたそうです…」

「分からなかつたつて？」

「あの、実はウォーテルさんが認めたのは昨日が初めてだつたんです。

これまで2人でのよつた話をしたのは数回程度みたいで…。その数回の間、しらを切り続けていたけれど、昨日になつて初めて認められたのです」

「口テツ君が頭を抱えながら説明する。

ウォーテルさんはどうして急に認めたのだろう？ あの口論で立場が悪くなつたから？ しらを切つてももう無駄だと思ったから？ しかし、他に理由があるのだと、あたしは直感で思つた。

「僕、昨日は本当に驚きました。認めたのが王様達に行き渡れば、ウォーテルさんの立場がなくなつてしまつのに」

「オイラもそう思つマロ。しらを切つていれば、まだ安全なの…」

「あたしもよ！ 何か他に理由があるのよ」

「そうですね。でも、どんな理由が？」

「…」

直感で思つただけで、理由は分からぬ。あたし達の中で理由が分かる人なんていない。

「と、とにかく、これからどうすればいいの？？」

「今後どうするかなんて、全く考えもつかないあたし。

「このまま、様子を見るのが1番マロかね？それとも…」

マーロンはそこで言葉を途絶えさせた。コテツ君が顔をしかめて、

「やはり様子を見るべきです！2人とも、しつかりしていらっしゃるから。サラサ様が突飛な行動に出なければいいのですが…」

「大丈夫！心配要らないわ。サラサには、あなたというお供がいるわ。そうでしょう？」

あたしの言葉に「コテツ君は自信を持ったようだ。そして、今まで1番頼もしい言葉を発した。

「はい！任せてください。本当にありがとうございました」

「頼りになる！あたし達でなんとかできるはずよ」

「そのためにも、これからしつかり考えないといけないマロね」

みんなで微笑み合つのだつた。

絶対に2人を離れ離れになんてさせない。

いつか、2人で笑い会える日を届けてあげたい。ううん、届けてあげる！！

じつでしたか？

心配するお母さん、パチシベラのソリドでした。

マーロンは二つの問題、パチシベラと仲良くなつたのか……

最後まで読んでいただきありがとうございました♪

次回もお楽しみにーーー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4183v/>

歌姫物語（ディーバ・ストーリー）

2011年10月9日03時27分発行